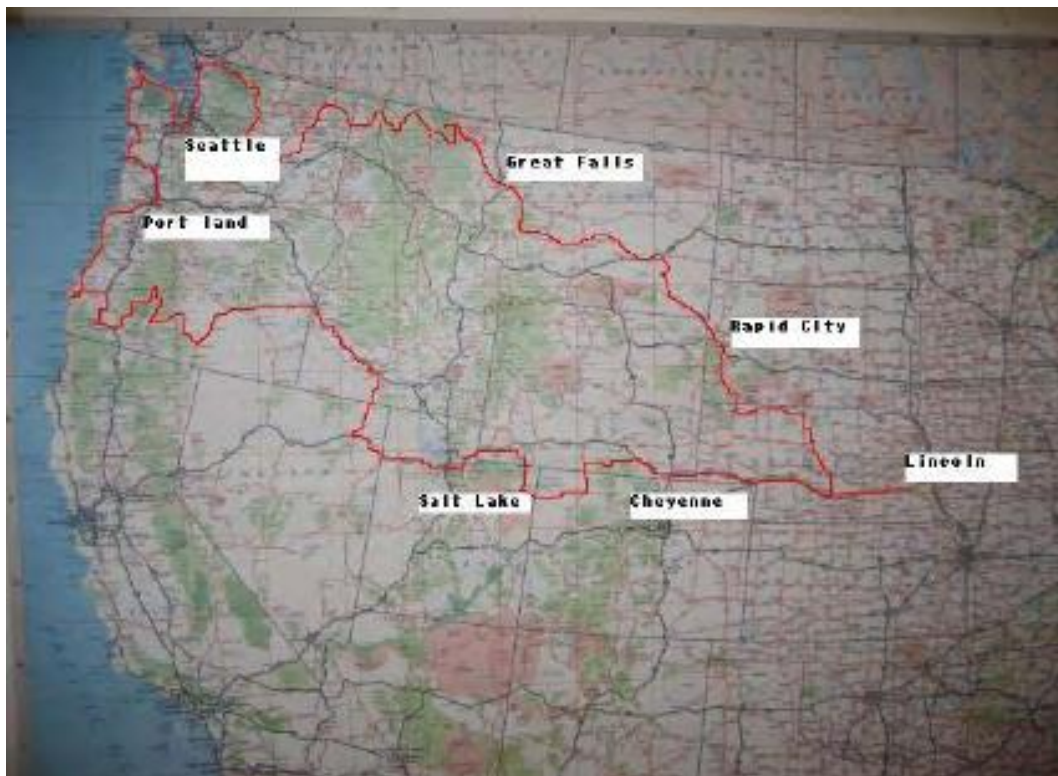


俺、今度オレゴンに行くんだ



Jun. 27, 2008 to Jul. 11, 2008



俺、今度オレゴンに行くんだ。

一日目 Lincoln to Rapid City

去年の暮れにアメリカの南東端にあるフロリダのキーウエストまでドライブしましたから、今回はなんとしてもアメリカの北西端を征服しようというわけです。それに、「Lewis と Clark」の目的地がコロンビア川の河口ですから、これもアメリカにいる間に是が非でも見ておきたいということで、今回のドライブは、11 日というとても長いドライブとなりました。

その第一日目は、ネブラスカからサウス・ダコタのラピッドシティまで。ここにはこれまで何回も来ているので、とくにどうしてもここに行かなくてはという見所はないが、それでもいつも同じルートでは芸がないと、今回は、つぎのこだわりでルートを選んだ、そのひとつは、ネブラスカでこれまで走ったことのないハイウェイを走ること、二番目は、インディアンの大虐殺として有名な Wounded knee の地を訪れること、そして、最後に、有名なバッドランドでも、人気のある北とは別に南のバッドランドを見ること、というわけである。

ネブラスカをひた走る

ネブラスカのルートは、Grand Island から 281 号をとおり、St. Paul から 11 号を走る。そして、183 号に合流し、Bassett から 20 号を Valentine までゆき、さらに、Gardon まで、ひたすら、西に向かう。ここから、北にルートを取りサウス・ダコタに入り、Wounded Knee まで行って、さらに、バッドランドに入るというもの。地図を見ても、なぜこのルートかといわれると、物好きとしか説明のしようがないようなルート。そこに何か発見があれば、これは、してやっつたりの気分というわけ。



これがネブラスカのハイウェイです。

第一日目ということもあり、少々、長いドライブとなるということで、朝、7 時 10 分に

アパートを出発。Grand Island からは、North Loup という、ネブラスカのサンドヒルを流れる川にそった街道 11 号を走る。サンドヒルの大草原のなかを悠然と流れるこの川、なかなか水の量も豊富だ。途中でオーバールックのポイントがあり、ここで一休み。川を見下ろすこの台地、展望が開けなかなかの名所だ。そこからすこし行ったら Chalk Mine の Historic Site があった。今でも、ここで採掘が行われているのだそうだが、かつては、随分と盛んに採掘がされていたとのこと。ここで産出された Chalk(チョーク、石盤) が、この川を下り、オマハまで運ばれていたわけだ。こんな産業があれば、ここに町ができ、人が集まり、繁栄するというのがアメリカのパターン。とにかく、どこに行ってもこうしたその場所に独特な町にお目にかかれるというのがこれまたアメリカらしいところ。この川の中流に Calamus という堰きとめ湖がある。なかなか大きなもので。こうした湖があるとたちまち、そこにボートを持ち込んで、ウォーターレゾートというのも、これまた、アメリカの典型的なりクレーションのパターン。その例にもれず、ここにも、大きなボートの波止場と、そして、魚釣りのポイントがあちこちにある。この湖を過ぎると、183 号線はいよいよサンドヒルの真っ只中を走る。それにしても、見渡す限りの丘は見事というしかない。この道路の脇に郵便受けが四つ並んで立っていた。勿論、その郵便受けの主はそのハイウェイの入り口からこの丘陵のずっと奥に住んでいるのだが、この見渡す限りの草原、どこまで続いているのかその先に人家らしきものが見当たらない。おそらく、この奥、何マイルも入ったところで生活しているのであろう。それほど、このあたりには人気がないということ。ところどころに湿地帯があったが、誠にうらやましいほどの自然そのものである。



ハイウェイ 20 号、こんな道を走るんです。

でがたがただった道路が、急に滑らかな舗装道路となる。とにかく、ネブラスカのハイウェイは舗装が悪いことこのうえなし。走っていてもタイヤからのノイズが思わずパンクをしたのかと思うほどのがたがた。スピード制限が、ネブラスカでは、55 マイルのものが、

Bassett という町で、20 号線に入るが、このハイウェイはネブラスカの一番北を走っているもので、ここを西に向かう。が、ネブラスカの南と違い、とうもろこし畑は極端にすくない。あるのは、たくさんいる牛さえ、草原のなかでは、ちょっとしたしみくらいにしか感じない大牧場だけだ。そんな道を、とにかく西に、西にと進む。Gardon からは、北にコースを取ってサウス・ダコタに入る。途端、それま

サウス・ダコタでは、65 マイルとなる。ネブラスカからサウス・ダコタに入るには、スピードが上がる方向なので問題はないが、その逆だと、ネブラスカのなかをついつい 65 マイルで走ってしまう。これが、パトカーにはおいしい餌食というわけか、このあたり、やたらとパトカーが多いのである。そんなことを実感しながら、Wounded Knee の Valley につく。ナビで、途中、右折れの指示があったが、そこは、牧場の入り口。結局、そのまま進み、ハイウェイの脇にある看板をみつけ、このあたりでインディアンの虐殺があったという大草原を見て、ひとしお感激。何も無い、つまり、隠れるところ、逃げ込むところもないこの場所でインディアンの大虐殺があったとのことであるが、これは、白人にとっても苦い歴史の一コマ。そんなこともあり、この地はあまり人には知られていないし、また、博物館もここは何十マイルもはなれた、北のほうにある。ここを訪れる人は、すこしインディアンのことに詳しいひとだけかもしれない。でも、この日、数家族の車がここにきて、歴史のあとを辿っていた。かれらは、インディ



Massacre of Wounded Knee の解説をした看板

このインディアンの虐殺については、こんな解説があったので紹介したい。

1890 年の 12 月 29 日の朝に、Sioux の酋長 Big Foot とその部族のもので彼についてゆくもの 350 人が Wounded Knee Creek の土手にキャンプを張っていました。彼らの周りをアメリカ騎兵隊が取り囲み、Big Foot の逮捕とかれの戦士達の武装解除を迫っていました。状況は非常に深刻でありました。いざこざが何ヶ月もの間続いていたのです。

Ghost Dance の願い

以前に、埃高き Sioux 族は、自分たちのどこにでも自由にいくことができる生活が破壊され、バッファローがいなくなり、そして、自分たちが生きていく間は、インディアンの統治官に依存して居留地に拘束されるということに気づきました。かつての栄華の日々にもどろろという絶望的な挑戦のなかで、たくさんの人々が、Wovoka という教条的な祈祷師の神秘的な新しい予言に救済を求めたのです。South Dakota の Sioux 族の使節が Nevada まで、かれの言葉を聞くために旅にでました。Wovoka は自分自身のことを救世主と自称し、死というものにより、インディアンたちがたくさんの狩猟をしながら生活

をすることのできた古い時代にもどることが出来る道であると予言しました。新しい土地の潮のような波が大地を覆い、白人達を埋葬し、そして、もとの大平原に戻すことができると予言したのです。そのようなことが現実になるように、インディアンたちは、**Ghost Dance** という踊りを踊ることにしたのです。たくさんの踊り手が、ワシやバッファローをイメージするように飾られた、色とりどりのきらびやかな衣装をまといました。彼らは、この“**Ghost** の衣装”が、自分たちをあの青白いメッキの弾丸から身を守ってくれるものと信じていたのです。そして、**1890** 年の秋には、この **Ghost Dance** は、**Dakota** の居留地の中にある **Sioux** 族の村の間に広まってゆき、それが、インディアンたちを勇気づけ、白人達に恐怖を与えるようになっていったのです。絶望的になった **Pine Ridge** にいたインディアン達の統治官はワシントンにいる彼の上官に、次のような電報を打ったのです。”インディアンたちは、雪のなかで踊り狂い、野蛮で、狂っています……。われわれは防衛作が必要で、しかも、それはいますぐに、です。指導者を逮捕する必要があります、事態が収まるまでどこか軍の施設に拘束すべきです。これは、今すぐに実行すべきことです。”そして、**Standing Rock** 居留地にいる酋長の **Sitting Bull** を逮捕するようにとの指令が出ました。**Sitting Bull** は、**12** 月 **15** 日の襲撃で殺されると、次に目標になったのは、酋長の **Big Foot** だったのです。

かれは、**Sitting Bull** の死を知り、**Big Foot** はかれの部族の人を **Pine Ridge** 居留地に安全な場所を求めて南に移動をさせました。軍は **12** 月 **28** 日にこの集団を拘束し、彼らを **Wounded Knee** のはずれに連れてゆき、そこでキャンプをさせたのです。次の日の朝、肺炎と乾燥で苦しんでいた酋長は、自分の部下の戦士達の真ん中に座り、そして、軍の指揮官と協議をしました。と、突然の朝の薄明かりの中に銃撃の音が鳴り渡りました。数秒間の間に積みもった思いがいきなり爆発したのです。インディアン達は取り上げられたライフルを取り戻すために走り回り、一方、軍は、**Sioux** のキャンプに容赦なく一斉射撃を加えたのです。高台からアメリカ軍の **Hotchkiss** 砲はブドウ弾をインディアン達のテント小屋に機銃掃射したのです。男、女、そして、子供たちが逃げ回るなか、砲弾の煙が当たり、に充満していました。多くのものが、まるで十字砲火を見下したように打たれることを承知でキャンプの隣にある峡谷のほうに逃げてゆきました。

やがて、銃弾の砲火が収まり煙が晴れ渡ると、なんとその場所には、酋長の **Big Foot** をはじめ、**300** 人も **Sioux** 族の人たちが死んでいたのです。騎兵隊のほうは **25** 人の犠牲者が出ました。残されて騎兵隊が死者の片付けという過酷な仕事につくと、おりしも北からの強烈な厳しい寒波がやって来たのです。数日後に彼らはこの事件の後始末を完了しましたが、しかし、この **Wounded Knee** で起きた虐殺は、あの **Ghost Dance** の運動を完全に抹消し、インディアンの抵抗戦争を終末に導いたのです。

バッドランドで

さて、これを知った人はどんな風にいまのアメリカを理解するのであろうか。そんなことを考えながら、ここから、北の田舎道をたどると南のバッドランドに入る。北と違い、南は広さでは負けをとらぬものの、交通の便が悪いことと、あまり宣伝も行き届いていないということで、訪れる人はすくない。それでも、ここには、車ではいることができる、



溪谷があるということで、ここを尋ねることにした。

話は余談になるが、ここまで私の車のあとを何時までも付いてくるパトカーがいた。なぜかなとたびたび速度を落としても追い抜いてゆかない。こちらも制限速度を守っているのとくに心配することはなかったが、とにかくいやな感じであることには間違いない。

このパトカーが、Kyle という町への分岐点のところで、漸く別れていった。そして、ビジターセンターによったら、ここのレンジャーの若い女性が、あの町でつい先日トルネードが発生したのよと説明してくれた。なんと、折角ここまで来たのだからと、そのトルネードの写真が絵葉書になったものをプレゼントしてくれた。なんとも、人懐っこいレンジャーだ。最も、ここのビジターセンターには彼女が一人。すこし、寂しい気がしたが、これが現実なのだろう。南のバッドランドの観光客は少ないのだ。北には何回か行ったことがあるので、今回、初めて、南のバッドランドを見にきた、といったら、とても喜んで、このバッドランドについていろいろと説明してくれた。このバッドランドの凄さは、百聞は一見にしかず、のとおおり、とにかく、我が目で見なくてはなんとも説明のしようがない。北に比べ、とにかく広大な土地に広がっているので、全体を見ることは難しい。その何箇所かに、車が入ることのできるトレイルがあり、ここを走りながら、景色を楽しむというわけ。例により、ここが地球かというような異様な雰囲気山の山が連なり、また、その山陰が迷路のようになっている。なんとも不気味な感じがする。まさしく、バッドランドの名前がふさわしい。そんなことを考えながら走っていたら、なんと、「Why Die?」という看板が目にとまった。なるほど、そういうわけ



か。アメリカにも、日本の青木が原のような場所があるんだと、一瞬、脊筋が寒くなった。不気味さに輪をかけたわけだ。それにしてもこのスケールの大きさには驚く。車で一時間近く、同じような風景を楽しみながらのドライブ。なかなか来るチャンスがないので、今回は貴重な体験をすることができた。

この日の走行距離、 550 マイルでした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

二日目 （ June 28 2008 ） Rapid City to Geeat Fall

おー、なんとすばらしい。まさかと思われるほどの快晴。まさにダコタ晴れといわんばかりのすばらしい天気になりました。とにかく、雲は真っ青な青空に変化を添える程度に地平線近くに、一筆書きのしみのように僅かに浮かんでいるだけ。自分で言うのもなんだ



申し訳ありません。この景色、独り占め

といっても、時差が一時間あるので、その分だけ早起きをしたことになるのだが、早速、I-90

にのる。しかし、正直、いきなり、75 マイルでとばすのは、やっぱり不安。ここは、用心



この道も走っているのは私だけ



けど、これは、日ごろの心がけのよさのためとしかいいようがない。そんな朝早く、

してまずは、目をならさなくてはと、65 マイル程度でゆっくりゆっくり走る。それにしてもこのサウス・ダコタからワイオミングにかけての周りの風景は、それまでの大平原から一転、大丘陵と化す。これがなんともいえな



い大自然の偉大さを感じさせてくれる。とくに、サウス・ダコタから、ワイオミングに入るあたりは、ここに住んでいるひとが、どんな生活をしているのか不思議に思うくらい、自然が主役なのだ。まるで、大きな海原が、そのまま草原になったような、そんな景色のなかを、ハイウェイはただ、ただ、まっすぐに白い線を描いて伸びている。これが、アメリカの広さなのだというのを、楽しむよりも、あきれるばかりの思いで、軽やかにハンドルを握る。サウス・ダコタでは、制限速度が 60 マイルであったものが、ワイオミングでは、65 マイルとなり、なんと、モンタナでは、カウンティハイウェイの制限速度が 70 マイルなのである。つまり、田舎道を 110 キロでとばすのである。これが、モンタナの広さを痛感させる。モンタナの南東では、Custer という地域。勿論、この名前の由来は、ここでインディアンと戦い、壮絶な全滅をしたカスター将軍になぞらえてものであろう。そのカスターの領域を東西に走っているのがハイウェイ 212 だ。とにかく、このハイウェイから



見える景色は、緑の大丘陵地帯。この丘にはさまれてバレーがあり、ここに牛が放牧されている。が、その広さでは、牛たちも、別に逃げ出しても逃げ切れるようなものではない。というわけで、のんびり、際限もなく広がる草原の草をのんびり食べている。どこまでも続く、そして、草原しかないこのハイウェイ。そんなところで寝転んで足こぎする自転車サイクリングをしている者がいる。「えっ、この先、次の町まで 30mile とあるぜ。よくや

るよ。この日はどこまで行くつもりなのだろう。」アメリカ人のとてつもない計画に仰天。自転車なら、時速 10miles くらいだろうから、彼は、三時間くらい、孤独に耐えるわけだ、と余分な心配をする。

なんの変化もないそんな景色のなかを一時間ほど走ったところに、レスト・エリアがあり、ここでようやく、朝の眠気から頭が冷めたかんじ。ここは、インフォメーションセンターにもなっており、モンタナの観光地の情報が全部手に入る。ここにいたおばさんに、これから、モンタナ、ワイオミング、オレゴンとドライブしてゆくんだったといたら、ここに、その州の地図が揃っているよと紹介してくれた。これは、ありがたい。目的の州の地図は、その州に行かないと手に入らないというのが、こちらの常識。だから、思わずこのおばさんには感謝、感謝である。そんな感じで気分をよくしていたら、



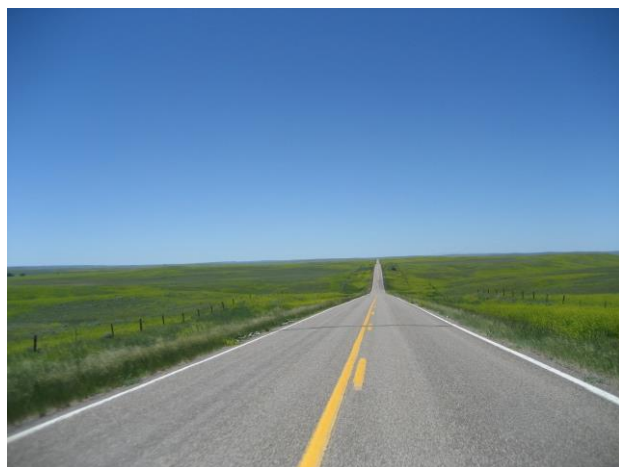
一台の観光バスから、学生がどっと降りてきて、たちまち、レストルームを占領。しかも、長い列さえできている。これには参った。でも、この先、目的の Miles City までは、80 マイルある。ここは時間が掛っても何とかしなくてはと、時間つぶしにこの子供たちにどこから来たのかと聞いたら、Washington だという。これから帰るところだと言っていたが、私もこれから、モンタナを回り、アイダホからワシントンに行くのだと説明したら、とたん、何か親密な雰囲気になり、「今度は初めてか?」、「どこから来たのか」などと聞いてきた。こちらの子供たちはこうした初対面の人たちにも、積極的に話しをしてきて、何の屈託もないところが気持ちいい。

隣に、ヤマハのオートバイを乗っている人がいた。残念ながら、そのオートバイのシートは、当社の製品ではないが、私はオートバイのシートを作っている会社で働いているといったら、とても親しく、「このシートは、先日特注で手に入れたものだ。」とか、「お前のところはどんなものを作っているのか」などと聞いてきた。とにかく、旅をしていて、オートバイでツーリングをしている連中をよく見るが、そんな連中にはつつい親しみを感じ、話かけてみたくなるのである。あわよくば、Honda 車で



牛の焼き鰻の説明 流石モンタナ

Miles City から Forsyth という町まで、I-94 に乗る。ここは、以前に Clark の通ったイエローストーン川をトレースするときに通った道。ただ、そのときは朝一番のドライブであつたので、やっぱり、ゆっくり景色を楽しむほどのゆとりがなかったのかもしれない。こんど、ここのレスト・エリアに入ったら、なんと、そのイエローストーン川を見下ろす



これが、Big Sky Montana です。

すばらしい展望台があつた。多分、Clark と Sacagawea がこの川を下っているときには、インディアンがここから、眺めて監視をしていたのだろうと想像して、記念の写真を撮る。

この日の目的地、グレートフォールに行くには、いろいろなルートがあるが、ここは、Forsyth からルート 212 に入る。なんに行っても、この道が Lewis and Clark Highway というのがうれしい。

どんな景色を楽しめるかを期待するの

ではなく、この名前がついているだけで、私にはここを通る価値が十分にあるのだ。

果てしない大草原のなか、ぽつんぽつんと牛が放牧されているが、人家らしきものは、この広さからするとほとんどないに等しいというくらい。なかに、町のしるしがあり、スピードを 35 マイルに落とすようにとの指示があるが、これも、数百メートルもいけば、また、



おッ、山だ

70 マイルとなるのだから、このあたりの町は、本当にガス欠対策であるようなもの。Ingomar の町は、ちょっとした水場の脇にできた町であるが、ここは、鉄道が敷かれ、このあたりの産物、牛の集積地として反映したなどという看板が立っていた。Round Up の町は、Billing に通ずる 87 号線と交差とする町で、なかなか大きなまち。なんと言っ

ても、街中に Casino があるくらいだから、近隣の農家の人たちの憩いの街な

のであろう。ここを過ぎたあたりから、なんとなく、遠方に頂きが白くなった山々の姿が見え出した。感激である。久しぶりの山の姿。これまでの大草原とは雰囲気が違う。ただ、ただ、水平線だけの景色に、今度は高さ方向の景色が楽しめるのだ。といっても、まだまだ、地平線のちょっとした起伏のなかに見え隠れするていど。あー、早く、あの雪山を存分に感じたい。そんな気持ちになりながら、さらに西へ西へ。そして、Harlowton の町あたりまで来ると、それまで、見え隠れしていたあの雪山が大分その裾野を見せるようになった。とにかく、ここからさえぎるものもなく、その頂まで見上げることができる、そんな雰囲気の雄姿だ。地図の感覚では、カスター将軍の騎兵隊を全滅させたあの有名なインディアンの酋長 Crazy Horse の名前のもととなった、Crazy Peak のようだ。なんということか、ここで、あの山を拝むことができたなんて。ちょっとばかり、センチメンタルな気分。



White Sulphur Springs というまちの手前で、89 号線にはいり、Lewis and Clark National Forest をとおり、Great Falls へ。いよいよここからモンタナの山岳地帯に来了という気分。

この日、600mile 近くの強行軍であったが、予定通り、現地時間で6時にはモーテルに入ることができた。

この日の走行距離は、604miles

Rapid City ----> Belle Fourche ---> Alzada --> Broadus ----> Miles City

----> Roundup ----> Harlowton -----> White Sulphur Spring ---->
Great Falls

俺、今度オレゴンに行くんだ。

三日目 Great Fall to Kalisopell

ここ、Great Falls は、Lewis & Clark の探検隊がとても苦勞をして通過したところ。そんなわけで、探検隊にちなんだ様々な催しものが行われる。彼らがここに到達したのは、1805 年の 6 月 13 日になっている。しかし、ここでおよそ半月の間、ここに立ちはだかる滝の前で彼らは悪戦苦闘をしたわけだ。そのときの様子を The Journey of the Corps of Discovery からうかがい知ることができる。

徒歩で Lewis と 4 人の男が先立って、今度は別の支流に沿って偵察に出かけた。

何とか、冬にインディアン達が彼らにあると言っていた滝に出会うことを願って。

6 月の 13 日の朝、Lewis は遠くの方で、確かに吠えるような音がするのを聞いた。それから、水平線の上に、彼は川の細い煙突のような通路に立ち上る煙の柱のようなものを見た。彼は急いでさらに 7 マイルほど前進した。



これが、Rainbow Fall

ついに彼は、その音と霧の源にたどり着いた。そして、彼は、自分と Clark の判断が正しかったことを知った。彼の目の前に広がっているのは、——幅、300 ヤードもあろうかという、そして、高さは 80 フィートもある ——まさに正真正銘のミズーリの Great Fall (「偉大なる滝」) だった。

この崇高で壮大な情景を眺めていると……わたしがこれまでに見た中では、最も壮大な景観を作っている……いつも決まった形ではなく、なにかその流路の下で水を受けとめ、水を打ち砕いて白い見事な泡をつくり、それは、一瞬にして様々な形となり、時には 15 フィートも 20 フィートも舞い上がる水しぶきを吹き飛ばしている、そこにはそんな岩が隠れているのだ。泡は渦となってその水が流れてしまう前に、ほとんど決まった形を作ることはない……。

その滝から湧きあがり、水滴となった水しぶきに太陽の光線が反射して、素敵な七色の虹ができ、この堂々とした壮大な景観の美しさをなお一層素晴らしいものにしている。

とてもその美しさを言い表せない文章を書いてから、わたしはもう一度その滝を眺め、その景観を表現するという考えの物足りなさにうんざりして、もっとそばに行き、わたしのペンで絵を描くことにして、早速始めたが、それもわたしが最初に見た時の感動を文章で書いたものよりも多分、うまく描けないだろうと考え直した。わたしがしたかったのは・・・、ひょっとしたら、この開けた世の中に、時が始まってから、文明人の心のなかから消えてしまった、この実に堂々として、崇高で壮大なもののまさにその原型をよみがえらせることができるかも知れない・・・ということだ。

Meriwether Lewis

Lewis は川下で待機していた Clark にメッセージを送り、残りの探検隊をつれて上がってくるように伝えた。一方、彼はさらに前進し調査をした結果、半日ぐらいで丸木船を持ち上げようとしていた計画がとんでもないことだと気がついた。なんと、10 マイルの間にまだ、四つも滝があったのだ。

彼らは、これらの滝の全部を結局は迂回して船を持ち上げなければならなかったのだろう。——18.5 マイルもの岩山と、夏の灼熱の太陽の下で熱せられた土を越えて。かれらはまず、綿の木の幹で粗雑な台車を作った。そして、彼らの荷物の中から重そうなもののいくつかを隠し場所に埋めて、あとは全て、陸路で身を切られるような苦痛を感じながらこれらを運び始めた。

隊員達はありったけの力を出し絞り、体力と技能を使い、カヌーと荷物を引き揚げるときには、たびたび草や、小さな木、そして時には石をもつかんで、もっと力がでるようと頑張った。

William Clark

(鈴木 誠二 訳)



これほどまでに Lewis が感動した Great Falls。一時でも彼との共通の場が持てるならと、この日は、ユックリここで時間を費やすことにした。ここには、Lewis & Clark Interpretative Center というのがあり、彼らの業績を詳しく紹介してくれている。そのセンターにまず、立ち寄る。ところが、開館が 9 時。8 時にここに着いたら、

もう一つの滝、Eagle Fall

なにやら沢山の人が催し物の準備をしている。ひょっとしたら速く開くのかかもしれないとの期待で、そっと覗いてみるが、やはり開館は9時。ちょっとイライラするが、それなら、先に滝を見てこようということで、**Rainbow Fall**に向う。その前に、ちょっとした滝があったが、これは、**Eagle Fall** とよばれているもので、広い川幅一杯に堰きとめられたダムの上に広大な滝を見ることができた。滝の高さはたいしたことはないのだが、その広さが、そして整然としているところが、なにか芸術的なものを感じさせた。この滝で感動していたら、この **Rainbow Fall** のほうは、これよりも規模が大きい。ダムのため一部、水量が規制されていたが、それでも放流されているところは猛烈な水しぶきが上がり、そのすさまじさを感じさせた。**Lewis** は、この全体を見たのだから、そこから上がる水しぶきのなかに幽玄な世界を感じたのだろう。

この滝に感動していたら、横に4人ずれでサイクリングをしてこの滝を鑑賞している家族がいた。お願いして写真をとってもらう。こちらには、こうしてサイクリングをして歴史をトレースしている人たちが沢山いる。その人たちのために、サイクリング道路がきちんと整備されていてとても羨ましい限りだ。



こうして時間つぶしをして、いよいよ、**Interpretive Center** へ。なかには、**Lewis** と **Clark** の苦勞を紹介したものがテーマ別に展示されている。彼らが、様々な障害にぶつかったときにどんな風にして解決していったのか、これがたくみに質問形式で解説されていて、これの一つ一つ実物を見ながら、考えていくと、これはなかなかいい勉強になる。家族連れできている人は、両親に聞いたり、

それでも分らない時には解説員がしっかりと教えてくれるのである。こんな素晴らしい勉強ができる子供はとても幸せなような気がする。

展示してあるものは、**Lewis** と **Clark** の本のなかで解説されているものが殆どであるので、改めて詳しく説明を読む必要がなかったが、それにしてもインディアン生活用品がよく集められていた。時間が大分たってしまったので、早々にお土産を買い、次のグレーシャーに向おうとしたら、なんと、今度は土産物屋は、十時開店だと。店の中にどうしても買いたいものが展示



Lewis と **Clark** そして、犬の **Seaman**
その向こうに **Sacagawea** 思わず、感激

されていた。それは、探検隊が自分たちの位置測量のために使った六分儀器。もともと天体観測のために使われるものだが、これを使って彼らは自分たちのいる位置と、アメリカのこの大地を流れるミズーリ川の流域の地図を実に正確につくった野である。そんなことに執着して少々、値がはったがこれを購入。満足この上なし。



ちなみにグレート・フォールの町はこんなところという紹介をします。

無理して買った六分儀器

ビッグスカイカントリーといわれるモンタナの中心部にある町、グレートホールはとりわけすばらしい自然の環境と景色に囲まれています。ここには肥沃で、また生産性の高い土地が、なんと、西にはロッキーマウンテンから、そして、東には Little Belt 地帯から僅か数マイルしか離れていないところにあります。



Great Falls を流れるミズーリ川

滝なのですが、が流れているのです。

この町は、自然が与えてくれも最も恩恵に溢れた水系のひとつである悠々たるミズーリ川の辺に位置しています。ミズーリ川こそ、この町の名前そのものを与えています。そのミズーリ川が町を切断するように流れ、そして、ここには、5つの意気を飲ませるような滝を含み、500フィートにも及

ぶ落差のある幾つもの急流、これが、まさしくミズーリの偉大なる

Great Falls は、55,000人以上の市民ばかりでなく、ここを訪れる人たちにとってもとても魅力的で気分転換となるようなさまざまな催しものを提供しています。

Great Falls、もしくは、Electric Cityとも言われていますが、ここは地理的には、二つの国立公園、Glacier-Watertton International Peace Park への入り口そして、Yellowstone Park への重要な通過点の町として、モンタナの中心近くに位置しております。



Electric City として、この町は、かの有名な 1805 年の Lewis と Clark の探検隊と共にその長い歴史を持っています。彼らこそ、アメリカが買収した、大平原でうなりを上げるバッファローの大群に溢れたこの Louisiana 領域を探検したのです。Great Falls の地には、主として Blackfeet という原住民インディアンがずっと以前から住んでいました。

Lewis と Clark こそ、このミズーリ川の“偉大なる滝”の光景を目撃したものとして知られている最初の西洋白人でした。かれらは、この滝のうなりをなんと 7 マイルも離れた地で耳にしたのでした。

そして、探検隊は自分たちの荷物をこの滝を迂回して持ち上げるのに、実に一ヶ月近くも要したのです。この探検隊が 1805 年の 7 月にこの地を離れる前、かれらは White Bear Island というところで、7 月 4 日の独立記念日を祝福したのでした。

舞台は Great Falls の発展のために設定されました。それは、Paris Gibson という名の男のために準備されていたのです。



町の中心にある立派なコートハウス

Gibson は 1882 年に西部にやってきました。彼は、町のためにブランを立てそして、それを James Hill の前に差し出したのです。その彼こそ、鉄道敷設の会社の重要人物だったのです。Hill は、この町が鉄道敷設にとって、とても重要な分岐地点になると知っていた Gibson

に経済的な支援を約束したのです。

他の西部の町と違って、**Great Falls** はまさしく、実務的でとりわけ思慮分別のある男によって町の建設計画がなされたのです。町を建設する中で、**Gibson** は町の通りを正確に、まるで矢が通るようにすることを心がけ、その上、彼は、886 エーカーもの市民公園を作ったのです。**Gibson** は、この美こそ町にとって重要であると考え、榆、トリネコの木、そして、もみの木などを町のすべての通りの街路樹として個人的に植林しました。

(**Great Falls** の紹介記事より、鈴木誠二訳)

でも、こうして、予定通りのはずが予定の崩れ始めとは、このときいさかだに知らずでした。

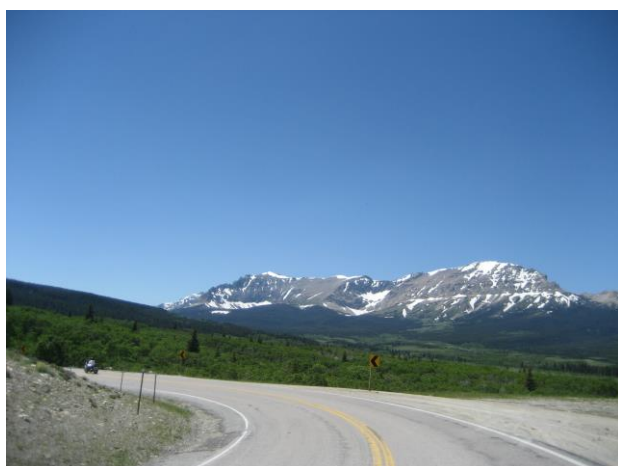
Great Falls から、89 号線に入るのに、少しの間、インターステーツ 15 に入るがここで道を間違えて、おかげで **Great Falls** の町を一回りドライブという形になった。なんと、ここに製油所がある。なんてこった。

89 号線にはいるといよいよ山に向かうという感じだ。途中に、**Fairfield** という町があるが、ここを過ぎたところで突然大きな湖が出現。しかし、なんと、干潟には塩ではないか。アメリカのこの辺り

にある湖がどうしてこんなに干上がる形で塩の平原を作るのか不思議でならない。たぶん、平原にできた湖は、太古の昔に湖だったものが隆起して、バレーになってゆき、水が長い年月の間に蒸発してしまったのであろう。



胸がわくわく



この辺りから遠くに雪を抱いた峰々が見え始める。いよいよグレーシャーだの気分

Browning という町、ここは、**Blackfoot Indian** の **Reservation** となっている。

Lewis は太平洋からの帰りのたびは、Clark と別行動をとり、この辺りを探検した。その時、Blackfoot 族と遭遇し、鉄砲と馬を盗まれるという事件に巻き込まれた。その時、彼らはそれを取り返すためにインディアンと戦い、二人のインディアンを殺してします。なんと、これが、その探検隊が殺傷事件を起こした唯一の事件だったのである。Lewis と Clark が、この偉業を成し遂げるのに、犠牲者がたったの 2 人だったというところに、この探検隊の素晴らしさがあると讃える人がいるのである。そんなことを思い出しながら、いよいよグレーシャーの山に向う。

いよいよグレーシャーだ

グレーシャーの入り口は、St.Mary だ。この辺りから見ると、雪をいただいた 3000 メートル級の山々の連なりは、何か別世界にたどり着いたような気分だ。



この日の宿泊地、Kalispell に行くには、Logan Pass という山越えをするが、そこがシーズン中の昼は混んでいるということで、まずは、少し北の Lake Sherburne に行く。ここからは、Many Glacier を楽しむことができる。湖の向こうには、Mt. Wolbur, Mt. Grinnell, そして、Allen Mtn. の山々がその威容を誇って、湖のその姿を映している。その岸壁のたかさに圧倒される。なんと、1300 メートルの垂直の壁と

のこと。この湖で水浴びをしている人たちがいたが、勿論、この水は氷が融けたもの、つまり氷水の冷たさというわけ。それにしてもここの湖の色が、とにかく真っ青なのにはびっくり。素晴らしい晴天の青い色が映えているのかもしれないが、その青さが一点のにごりもないのには驚くばかり。手を伸ばせば直ぐでも届くような近くに氷河をみて興奮し、Logan Pass に行くために St. Mary まで戻る。そして、いよいよということでゲートに行ったら、係員が、今日は、Logan Pass は Closed だと言う。「うっ。だって僕は今日、山の向こう側の Kalispell に行かなくてはいけないんだ。どうする?」



と聞いたら、「ああ、2号線からいけるよ。」とあっさり言う。こちらはもう動転状態。そんなにあっさり言ってもらっては困ると、「いまからでも大丈夫か?」と聞いたら、「途中の景色が素晴らしいから、ドライブを楽しめるさ。」との返事。地図を見れば、なるほど、ちょっと遠回りにはなるが、もともとこれがこの山を越えるルートだったということを考えれば、これもいいだろうと、これで一安心し、とりあえず、**Logan Pass** の近くまで、湯切るところまで行こうということで、湖の辺をひたすら氷河を目指して登っていった。**St. Mary Lake** を左手にみながら森をのぼっていくと、その木陰から白い雪を抱いた岩肌むき出しの山々が次々に姿を現してくる。一つの山に驚き、次の山に感激し、そして、その次の山に仰天し、とこんな具合で、まるで神秘の世界に引き込まれていく幹事。とにかく、この目で見る自然の威容、これが本当に現実なのかと、まさしく頬をつねりたくなるような光景。ああ、こんな景色を1人で楽しむなんて、なんとも残念という気持ちさえ湧いてくる。湖から、一揆に頂上までそそり立つと言う、その姿が、ますます迫力を感じさせるとともに、自分の足もとがああ頂上まで確かに繋がっているというわけで、余計に身近に感ずるのである。もつと若ければ、そして、時間があれば、ここに何日か滞在してトレッキングをし



たら、もう、ここは天国になってしまうだろう。**Logan Pass** を通ることはできなかったが、このグレーシャーの素晴らしさはこれで十分知ることができた。後ろ髪を引かれる思いはあったが、ここは、仕方なく、山を一度降りて、迂回路の2号線に向う。89号線から、49号線にはいるがこれが、また、**Two Medicine Lake** の脇を通っている。ここもなかなかの名所。それはいいが、こちらは時間に余裕がないので、ここは通過するだけ。

係員のおばさんは、景色を楽しむことができるよと言ったが、なんと、この山道ハイウェイは、右が300メートルくらいの崖になっている。勿論、アメリカではこうした山道にはガードレールなどない。路肩を滑ればそのままとりとめもないスロープを一揆に谷底まで滑ってしまう。真っ直ぐで平らなハイウェイと違いここは慎重に、と!!に言葉で言えるような、緊張さではない。制限速度、70mile?、トンでもない30mileがやっとな。とにかくハンドルを握る手は汗だらけ。そして、対向車が来ないように祈りながら、必死にカーブを切る。確かにあとになれば、ドライブを楽しんだことには違いないが、正直、景色がすばらしかったなどとそれを楽しむ余裕などなかった。2号線にでてしまえば、ここは幹線道路なので、それまでの緊張から解放されたかのように、75マイルでいい気分となって飛ばす。ウェストグレーシャーまで行き、時間があれば、**Lake McDonald** まで行きたかったが、緊張からの解放と、時間の都合で断念した。それにしても、あのおばさん、よくも気楽に「景

色を楽しめるよ。」なんて言ってくれたもんだ。

グレイシャーに入る前にビジターセンターがあるが、ここに公園を回る人のためにトラムがとまっていた。この車、天井が突き抜けられた観光用の小型バスのようなもので、このグレイシャー公園のなかをぐるぐるまわっている。車で来た人たちは、このビジターセンターに車を止めてこのトラムに乗り換えて、グレイシャーを案内してもらうわけである。このトラムは只というわけにはいかないが、とにかく料金が安いから驚き。だから、利用する人も多いし、また、グレイシャーのなかの車の数を減らすこともできる。その上、観光客は、効率的に、また、運転に気をとられることなく山々を鑑賞することができるので、とてもいいシステムと思う。



予定崩れで、結局 Kalispell には、8 時に到着。

Great Falls → Choteau --→ Browning --→ St Mary --→ Babb --→

Lake Sherburne --→ St Mary --→ Logan Pass (closed) --→ Kiowa --→

East Glacier Park --→ Summit --→ Essex --→ West Glacier --→

Hungry Horse --→ Kalispell

この日、776 マイル走りました。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

四日目 Kalispell to Moses Lake

はやいものです。今日でこのドライブも四日目になりました。この日は、モンタナからアイダホを走り、ワシントンのモーゼス・レイクまで。かなりの長丁場を覚悟しての出発。ところが、なにを勘違いしたのか、**Kalispell** から南に向かって走っているのに気がついたのは、眠気覚ましにビデオに朝の挨拶をしてから大分たってから。モーテルが街中のいいところにあったものだから、つつい早合点。北に行くつもりを南にむかって走っているではないか。それが正式なルートと勝手に勘違いをしてとんだ出だしとなった。ちょっと痛いトチリであったが朝、早く出発したので、これは帳消し。まず、北に 93 号線を **Eureka** という町まで。

実は、この **Kalispell** の町の中心には、立派なコートハウスがあり、ここがローターになっていて、真っ直ぐに進むにも、道路はぐるりと回る形になっているのである。だから、右折は、このローターの一番目の出口、直進は、二番目、そして、左折したいときには、三番目の出口を、それぞれ右折することになる。アメリカの古い由緒ある町にはこうしたローターが町の中心地、しかも、立派な



Kalispell のコートハウス

コートハウスを囲んでいるので、ここをぐるりと回るのも田舎町を走る一つの楽しみなのだ。最初の頃は、回っているうちにどちらに言ったらよいのか分からないこともあったが、いまでは、回りながら、太陽の位置を確認してコートハウスの写真を撮ったりすることもできるようになった。こんな立派なコートハウスがあるということは、ここにも古い開拓時代の歴史があるということ。これを調べてみるのも旅のあと、整理する時の楽しみなのだ。

資料によれば、この **Kalispell** は、モンタナの北西部では一番大きな街で、経済の中心地でもあるようだ。近くにある **Flathead** の湖が、アメリカでも有数の綺麗な水の保有湖ということで、貴重な水源になっているとのこと。勿論、西グレーシャーの入り口にあり、沢山の観光客がここに来ること確か。町を少し走った感じでは、とても清楚な雰囲気であった。

ここが、経済の中心地となったのは、勿論交通の要衝ということ。2号線と93号線が交差しているわけだが、この93号線はカナダに通ずる道路なのだ。その93号線を北上。カナダまで、あと7mileというEurekaの町を目ざす。ハイウェイ93号線は林のなかを走っており、対面通行で、両脇には立ち木がせまっている。そのなかを70milesでとばす。しかも、アップダウンあり、カーブありで、これはなかなか緊張。時に丸太を満載したトラックがいると、ここで追い抜きをやる。が、この時は覚悟が必要。遅いトラックがなぜかスピードを落とさないで懸命に走っているのである。とにかく、見えるところまで先に車が来ないことを確認して、反対車線に入って一揆に追い抜くのである。こんなところで事故を起こしては誰も助けに来てくれないだろうと、やや緊張の面持ち。

そんな山奥でのドライブ。それでも、時々、湖が顔を見せる。が、そんな場所には必ずリゾート開発が進んでして、ポートをとめた別荘がたくさんある。それにちょっと横の林のなかを覗き込んだら、こんな山奥で生活している人もいるのだから、ここは途轍もない国であることがよく分る。

ご存知の方もいるかもしれないが、モンタナはカウンティハイウェイのスピード制限は、70マイルなのだ。何でも昔は制限速度がなかったのだそう。そこで、なぜだろうという考えの結論。モンタナは広い。60マイルでは、時間が掛りすぎるのだ。「広いモンタナ、60mileじゃ、遅すぎる」ってなわけ。お分かり。



こうして、カナダとの国境まで、あと9mileというEurekaという町まで来る。ここまで来ると、もうカナダの旗がなびいている。経済圏は完全にカナダとなっている。

ここから、西に少し走るとKootenaiという湖のほとりにでる。この湖、カナダまで続いている。その名前、インディアンの言葉ではなく、列記とした英語だという。つまり、このダムは、もともと、Kootenai

Eureka の町 カナダの国旗が見える 川をせき止めてできたもの。ところが、この湖が途轍もなく長いもので、アメリカからカナダまで続いている。この湖の名前を公募し、それに当選したのが、このKootenai川、Canada, そして、USAの頭文字をとったつけられた、Kootenaiというもの。なんともユニークな名前だ。

さてさて、この湖はLibby Damによってできたもの。このダムはKootenai川の氾濫を防

ぐためと、発電用に作られたもので、その長さは、90mile にも及ぶ。その半分はカナダ領だ。そのため、ここでボート遊びをする人が、ついつい国境を越えてしまうのだそうだ。

勿論、これは不法入国になる。そんな注意書きが沢山あるほど、水遊びに夢中になるのだろう。感心したのは、このダムからの放流。というのは、このダムの下に生息するマスたちに一番よい条件の水温にいつもコントロールされているというのだ。水温が上がれば、ダムの下の方の水を放流し温度を下げ、水温が逆に低くなったときには、水面近くの暖かい水を放流するという方法。なるほどな、と



いう感じ。こんな配慮をするところはさすが合理的なアメリカ。それに、ここを管理しているというのが、US Army なんて ダムにかかっていた橋
すね。アメリカのダムが軍によって

管理されているというのは、ワシントン州、オレゴン州にもこのほかにも随分あります。少し見つけるのに苦労したが、ここの Libby Dam のビジターセンターに寄る。記念にとちよっとしたみやげ物を買ったのだが、聞いてびっくり、なんと、モンタナは Tax がゼロだという。なるほどアメリカは、州により法律が違うと聞いていたが、こんなことが実際にあるんだと、改めて感じた次第。

Libby から、再び、2 号線に入り、Kootenai 川ぞいに走って Idaho に。この頃になるとやたらお腹が空いてきた。それもそのはず、この川の名前ではないが、何も食うてないのである。というわけで、この川の名前、とても親しみ易いではありませんか。



Bonnars Ferry のまちのビジターセンター。ウィスコンシンに行くといったら、パンフレットを自ら選んでくれた。とにかく、こう言ったビジターセンターで働く人たちは親切なのです。ボランティアでやっているのですが、とてもここにゆとりのあるような人たちばかりで、こうした人と知り合いになれるのはとても楽しい思い出。そのビジターセン

Good Idea

ターで休んでいた中年のサイクリング叔父さん。なんと、ソーラーパネルをつけて、サイクリングをしている。グッドアイデア。思わず、写真を撮らせてもらう。



Lake Roosevelt

Idaho から Washington に入るには、Oldtown から Newtown を通り抜ける。そして、もう一度、20 号線を Tiger まで、北上。線路の整備を楽しんでいるたくさんのトラックとすれ違う。このあたり、Fur Trading の Historic site が仕切りと目に止まる。そして、Lake Roosevelt の辺、Kettle Falls までやく 1 時間の山道ドライブ。と突然、眼前に大きな湖が開けてく

る。Lake Roosevelt だ。これが凄い。

凄いの何のって。とにかく、ここも勿

論、堰止湖なので川の一部なのだが、この湖となった川、幅が広く、まさに湖という感じ。もつともここ、Kettle Falls はもともと滝のあったところで滝の上流には大きな湖があったようだ。入手した資料によれば、この Kettle Falls は Columbia 川の河口から、700mile も上流に遡ったところにあるが、昔は、ここまで鮭が遡上してきて、この滝を上るのに沢山の鮭が集まり、これが大変素晴らしい食料提供源となり、ここには古くから原住民の Shonitkwu 族の人々が住んでいたとのこと。その歴史、9000 年も遡るといふから凄い。しかも、彼らが使用していた道具というのが、この滝の周辺から採取される珪岩を使ったもの。ところが、ブリティッシュコロンビア、シベリア、そして、ヨーロッパからも同じ様なものが見つかっているというので、その大昔、この人たちの間でなんらかのコミュニケーションがあったことは確か。なんと壮大な歴史物語ではないか。

この湖は、Coulee ダムによってできたものであるが、その Coulee ダムまでは、ここから、100mile もある。とてつもなく長い湖。全長では、126mile だそう。これにはまいるぜ、と言いたくなる。この湖に沿って、山と湖のドライブを楽しむ。途中、Gifford という町で、脇に車が入ったのであとをついで行ったら、ここがなんと、この湖を渡るフェリーの乗り場だった。知っていれば、話の種の乗るつもりだったが、時間がないので、仕方なくまたもとの道へ。そして、Fort Spokane へ。このとりでは、アメリカでも比較てき遅く作られたものだそう。この辺りに住んでいた、Spokane 族、そして、Colville 族と毛皮の取引をする白人を保護するために作られて砦だということ。もう、ここはコロンビア川の流域でも一番の上流に当るので、比較的歴史の浅い砦ということなのだろう。

予定では、この Fort Spokane から Coulee Dam まで行くつもりでいたが、何しろ、山道

ドライブ、時間が余分にかかりすぎた。というわけで、この日は、こんなこともあろうかと考えていた近道、Davenport から Harrington に抜ける道を走った。この 28 号線は、それまでの山道とは違い、ワシントンの平原の中を突き抜ける道。なんとこれが凄い。途轍もなくという表現がぴったりなほど、どこまでも麦ばたけ。世界中が麦畑しかないと思うくらい、麦、麦、麦なのだ。まあ、こんなに麦を作られたのでは、いくら日本がむきになったってかなうわけないよと、観念し、麦畑で写真を撮る。ところが、これがこんなことで驚いてはいけな。なんと、暫くはしっていたら、今度は、道路の右は全面麦畑なのに、左側半分は、休耕地になっているのだ。たぶん、一年おきに麦をつくっているのだろう。なんとも、そのやり方の壮大なこと。ぎゃふんという感じ。そして、また、暫く走った



これが Montana の麦畑

ら、今度は、休耕地のほかに未開拓地があるではないか。何だ、何だ、このアメリカ、まだ未開地が沢山、というわけで、改めてこのアメリカという国が発展途上国、と言おうか、開拓途上と言うのが正しいのか、いずれにしても、何とでもしてくれという感じ。恐れ入りました。

と、感心しながら、随分遅くなったなと車を飛ばす。と、なんとなく、前方に怪しげなくも。もくもくと、空高く急成長しているのが目に見える。その雲の下には、まるでくらげの足のように黒い筋が何本も、そして、時々、なにやら閃光が走っている。ひょっとして、あれはサンダーストーム？ 一瞬、この広い麦畑の中に、まさかトルネードではないでしょうね、と不安が頭をよぎる。おそろおそろ窓をあけたら、風が急に出てきた。と、行く手に白い霧が前方の視界をさえぎっている。これは、もしトルネードだったらどうするのだ。逆戻りか、それとも、進路を変えるか、なんて心配をする。とにかく、この広い麦畑のなか、車は自分ひとりしかいないのだ。正直、心臓が早撃ちをしだした。あの霧の正体が分らない。でも、何とかまだ、風はそれほどでもない霧の中に突っ込む。と、意外。この霧が直ぐに晴れた。あとでよくよく見たら、これは、麦畑に散水をしている水のしぶきが風に流されているということが分った。それにしても、辺り一面を霧のようにしてしまうのだから、この辺りの散水の仕方も中途半端ではありません。とにかく、こちらはなんでも初体験なもので。とチョッとばかり照れ隠しの言い訳をした次第。

こんな弔辞で遅くなり、Moses Lake に着いたのは、8 時半。と思ったら、ここはもう、パシフィック時間。7 時半だった。儲けたとばかり、プールに入り、ご機嫌で一杯飲む。この

日は少々疲れたので早く寝る。

Kalispell Libby Dam Bonners Ferry Sandpoint Pries River Newport

Tiger Kettle Falls Miles Fort. Spokane Davenport Harrington

Odessa Moses Lake

この日の走行距離は、540 マイルでした

俺、今度オレゴンに行くんだ。

五日目 Moses Lake to Seattle

Moses Lake から Seattle までは、I-90 を使えば、三時間くらいで行くのですが、なんとしてもここは、National Park のひとつでもある North Cascade を見なくてはと、時間に余裕を持って、六時のはや立ち。

どこまでも葡萄園

I-90 を走っている間は、昨日の続き、麦畑がどこまでも続く。

I-90 を 30 分走ったところで、281 号線に入り、Quincy という町に向う。ここからもう一度、山越えに挑戦というわけだ。だがまだこのあたり丘陵地帯。大海原のようなだらかな丘が続く。と、何だ、あの緑の畑は？ 麦畑にしては丘に広がった緑は、傾斜がありすぎだ。実はこれが葡萄畑。思わず、「うっ」 一山



ハイウェイの両側、そして、ずっと向こうの丘もブドウ畑でした。

どころか、延々と続いている。丘を越えても、越えても、どこまで行ったら、ブドウ畑だ。「日本の武道も、この葡萄

には負けるよ。」と、ついつい負け惜しみの駄洒落。丘が全部葡萄園なんだ。と、そのなか



Lake Entiat 両側は禿山がどこまでも続いていた

うです、葡萄の収穫なのです。まったく、ここまでやるかというくらい、ブドウ園が続いている。あの丘も、この丘も、嫌になるよな、どこまで続くのかな、とそんなことを考えながら、ある峠を越えた途端、と、突然、ダムだ。今度はこれがアメリカの水力発電かというくらいものすごい水の量。地図には、Rock Island Dam とある。これがまたすごい。

昨日の **Roosevelt Lake** が **126miles** であったが、こちらにもそれに負けないくらいの長さだ。こちらは、右が崖、そして、左に白い雲と青空を映した湖というハイウェイだ。その風景の変化は見飽きない。ここから、数十マイル上流まで湖が続いている。**Lake Entiat** だ。このハイウェイから見る山がこれまでの山道と違い、岩肌が露出されたもの。それだけに、その崖の陰しさが伝わってくる。対岸にもその崖が連なっている。そして、その下のほうにほんの筆で一筋書いたようにハイウェイが走っている。時々、のみのように車が動いているのが分るが、その大きさを自然と比較すると、まさしく比べ物にならない。まるで崖にしがみついているよう。全く、自然とはかくも偉大なるものかと感ずる。**Chelan** というところで、ハイウェイは、川の右側を走るようになる。ここにもダムがあるが、このダムでできた湖、**Lake Chelan** の奥には、**Stehekin** という町がある。**50** マイルくらい遡るがここに行くには、道路はなく、フェリーでしかいけないというから、まさに陸の孤島とはこのことを言うのではないか。行くチャンスがあるとすれば、そこはきっと文明から隔離された幻想の世界に違いない。そんな想像をさせてくれるところが直ぐそこにあるなんて、アメリカ大陸のドライブ、これまた楽しいではないか。こうして、**Wanatchee Orondo Chelan Pateros** まで、崖と湖の間を走る **97** 号線を、スリルと景観を存分に堪能する。この素晴らしさは、いくら写真を撮っても尽きないし、なかなか口では説明できない。

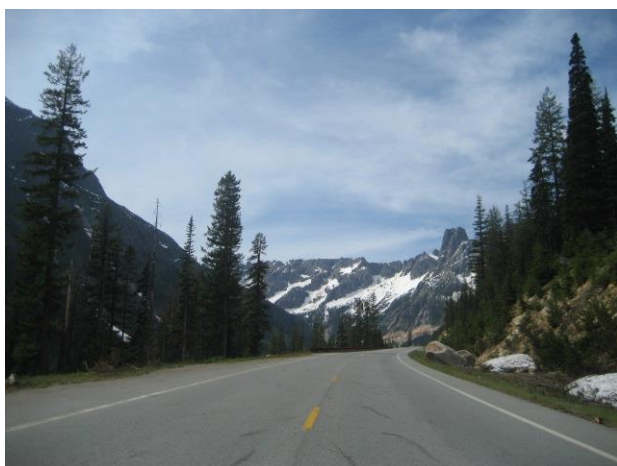


ノース・カスケード

Pateros という小さな町から **153** 号線、**Mathew** 川沿いに走る。そして、**Twisp** で **20** 号線と合流。いよいよ念願の **North Cascade** 入りである。**Mazama** あたりから、雪山が顔を覗かせる。**Silver Star Mtn** だ。そして、その遥か先には、これ

この湖の景観を楽しみながらドライブ

から行く **North Cascade** の山々が、雄大な姿を見せている。何百メートルもそそり立つ岩肌、そこに万年雪を携え、人間には近づきがたい威容な姿を見せている。**20** 号線の最高地点は、**Washington Pass**, 標高 **5,472** フィート。決して高いとも思わない。だが、アメリカとカナダの国境が北緯 **49** 度、ここは、すでに稚内よりも北だ。(わっ、かなわない)



嬉しくなりますこの景観

Liberty Bell Mtn. (2,359ft), Black Peak (2,734ft), Mount Logan (2,770ft), Ruby Mountain (2,258ft), Pyramid Peak (2,189ft), 360 度どこをみても、あの雪を抱いた猛烈な岩山。言わないこっちゃない、来てよかった。いい気分で山道を下っていたら、おっ、がけ崩れ。直前に岩が落ちてきた形跡。何しろ道路に小石が散乱し、土煙がまだ上っている。確かに、落石注意とあるが、危ない、危ない。実際に、石ころが落ちてきたら堂逃げろと言うのだ。そんなことを考えたら冷や汗が出てきた。早くここを走り抜けなくては。Disblo という地点を過ぎたところにダムがある。このダムの下に注ぐクリークがあるがこれが凄い峡谷。道の直ぐ右に大きな滝がある。



許してください。この景観独り占め

George の滝だ。そして、そこから落ちる滝水の上を道路が走っているが、この峡谷が数十



あの山の下を越えてきたんです。

メートルはある。下が覗けるようになった網目の歩道橋をわたることができるが、滝の物凄い音と、その峡谷の深さに思わず足がすさむ。なんとなく体がフワッとくるようだ。あんまり気分のいいものではない。ここは、おとなしく退散。そして、無事、North Cascade の山道を抜けるとそこは、もう両側がお花ばたけになった快適なドライブウェイ。鼻歌交じりのドライブで、インターステーツ 5 号に向う。と、突然、携帯が鳴る。誰からかと思いきや、小田さんから。「グランド・テトンをみて、感激し、これから、

ユタに向う。」と言って来た。アーチーズに行くにはどうしたらいいかなど、俄かツアーガイド。しかし、よくもまあ、ワイオミングからワシントンまで携帯が届くものだと感心。1000 マイル以上はある。

シアトルだぁー

I-5 号は、車線の数が違う。さすが、シアトルという感じ。田舎ものには車線変更がなかなか

か難しい。そのためこれまでは大都市を通過することを避けていたが、今では、ナビのおかげで難なく目的地まで着くことができる。ありがたいことだ。というわけで大都市シア



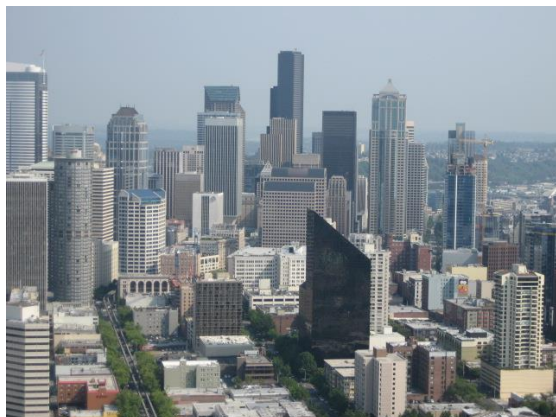
シアトルです。スペース・タワー



おっ、イチロウだ。

トルの町中を散策。まずは、スペースタワーに行くことにした。タワーの上から見るシアトルの町も流石だ。なんとシアトルの人口、4百万とか。近くに港があり、ここに、帆船が入ってきた。仕切りに新聞社のヘリが飛んでいる。なにかのイベントでシアトルを訪問したどこかの有名

な帆船なのだろう。その直ぐさきにも豪華客船がタグボートに案内されて港に入っていく



のが見えた。この独立記念日にはなにかの催し物があるのではないかな。

時間が少しあったので、今度はシアトルの町なかをドライブすることにした。しかし、やっぱり田舎ものには、大都会の中の道路は運転しにくい。一方通行が多いし、前の車について走っていたら、なんのことはない、その先で事故をやっており、なかなか前に進むことができない。うまく、空いている車線に入ったと思ったら、今度は、そこが、左折専用となっていた。こちらは真っ直ぐ行きたいのに、・・・といった具合。やっぱり、疲れる。というわけで、この日は少し郊外の Kirkland という宿泊地に向う。

Moses Lake --> Quincy --> East Wenatchee --> Chelan -->

Pateros -> Twisp --> Winthrop -> Dia blo --> Rockport -> Burlington

-> Seattle.

この日の走行距離は、386mile でした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

六日目 （ 7月2日 ） Seattle to Portland

こんなこともあろうかと、朝、六時にモーテルを出発したのに、この日の宿ポートランドについたのは、午後の九時半。なんと、13 時間半のドライブ。これには、いささか参りました。眠いけど、この日の記録を残しておかなくては。

やってる、やってる覆面パトカー



シアトルからタコマという町に向う。タコマとは、トヨタがアメリカで販売しているピックアップトラックのブランド名。なぜ、タコマなのか、ちょっと気になるところ。この日の朝は混んでいる I-5 を避けて、I-405 で南に走る。ところがそれでも車は一杯なんです。というわけで、その混雑防止のために、こうした大都会ではセパートレーンというのがある。これはバスと、ドライバーが単

独の車以外が走ることのできるレーン。ところが、**Tacoma から I-16 号へ**
ここが空いているのでついつい、走りたくなるん

です。というわけで、ちゃっかりここを走ると、パトカーに捕まるというわけですね。このパトカーに捕まった現場を見る。捕まえているのは、覆面パトカー。最近では、あのランプが、車のなかにあるものがある。自分だけなら注意をするのだが、後ろの車もこのレーンを走っているんで、安心とばかり何時までも調子にのってこのレーンを走っていると、なにのことはない、後ろの車はパトカーで、現場を押さえるために暫くの間追走しているのである。こんな風にして捉る車は、タダ、運が悪いだけではすまない。まあ、常習犯なのだろうから、同情の余地はないが、でこ、ここで捉るとこってり絞られるのはまちがいない。これは他人事ではない。スピード違反には十分注意をしなくては。くわばら、くわばらと、タコマから、16 号線にはいる。

ぎょ、ぎょ、空母だ

この辺り、入り組んだ半島に、さらに入り江が沢山ある。だから、ハイウェイの分岐もなかなか複雑。これは決して言い訳ではないが、**Bremerton** というところの分岐点で道を間違えた。どうせ、ナビもあることだし、道はその先でまた元の道にもどるだろうと、たかをくくって走っていたら、なんと、間違えたハイウェイは、一本道。そして、なんと、なんと、それが、海軍の基地の中に入る道だった。これは、またしても、あのオクラホマの **Lawton** で陸軍基地に紛れ込んだ二の舞かとドキリ。とにかく



ギョ、空母だ。僕はポカーン

かくカメラを取り付けた車はスパイと思われても仕方がないのである。いかんと思ったら、ちゃんとそんな慌てもものために、ゲートのところに U-ターンができるようになっていた。怪しまれてはいけないと、何食わぬ顔で、車の向きを変えてもとの道に戻る。が、それにしてもあの車の窓から見えた大きな異様な形をしたビルは何だったのだろうと、もう一度、それを確認したら、びっくり仰天。その大きなビルこそ、まさしく、航空母艦だったのだ。近くで見たものだから、あまりにもその大きさの凄さに、ビルと間違えていたのだ。しかも、その空母が三隻も停泊していた。この町、実は海軍造船所のあるところで、原子力空母がその補修や、解体のためにここに集まってきているのだそうだ。町には、やたらと閑静なアパートのようなものが建っている。それもそのはず、この空母の乗組員や造船所の従業員達の住宅なのだ。これまた、その数の多さにびっくり。要は、ここは、アメリカ海軍の北太平洋艦隊の重要拠点だったのだ。空母の物凄さに、ぽかーんという感じ。洒落を言っている場合ではなく、それこそ、スパイ容疑をかけられず、ラッキー。

霧がきりがなく・・・。

間違って、海軍基地に入るところ間一髪、Uターンし、そのあと、オリンピックナショナルフェレストのある半島に向かう。が、この半島の名前がない。あまりにも大きな半島なので、半島と呼んでいないのだ。そこで、ここは、オリンピック



この霧。 きりがいいから～あ

国立公園ということにする。が、この半島に入る辺りから、とにかく凄い霧になる。天気予報でもあまり芳しくはなかったが、それにしてもこの霧は凄い。直ぐ先が見えない。ところが、これが場所を移動するとまったく消えてしまう



Makah 族の博物館のトーテムポール

まないのである。でも、何とか、遅ればせながら、半島の先に着く。といっても、ここが Makah 族というインディアンの居留区になっていて、やっとここの博物館に辿りついたわけだ。海辺にあるはずなのだが、海岸すら霧にかすんでいる。何とか水平線を見たいと思ったが、到底無理だ。本当の岬、Cape Flattery は、まだその先数 mile のところ。ところがここに行く道路がどうもよく分らない。地図にもなく、ナビもこんな僻地の案内は、案内不可能とでている。というわけで、この岬を必死に探す。どうにか、この岬の入り口まできたが、実際の岬はまだその先をトレイルしなくてははいけない。どの程度かもわからず、また、以前として霧も流れていたんで、このトレイルは断念。まあ、ここまで来たのだから、よしとしようというわけだ。



Makah 族の博物館にあったデザイン

のだ。どうも、入り江には霧が立ち込めているようなのだ。海沿いに走る道路は、101 号線。しかし、半島の先に行くには、もう一つ田舎道の 112 号線を走らなければならない。この道、海を見ながら、林のなかを突き抜けるつもりでいたが、やっぱり霧が立ち込めているのと、やたらと工事区間が多く、そのたびに車を止められる。ちっとも前に進



アメリカの北西端に着きました

今日の目的はまだまだ、あの **Lewis & Clark** の辿り着いた、オレゴンのコロンビア川の河口まで行かなくてはいけない。ここまでののにちょっと時間がかかりすぎた。

そこで、もう一度、**Makah** の博物館までもどると、今度は少し霧が晴れて、海らしきも野が見える。砂浜が少しあり、ここで貝殻を拾う。北海の海の幸とでも言おうか、その貝殻の大きいこと。記念にと一ついただいた二枚貝は、日本のハマグリ程度のもの。こんなものが浜にごろごろと転がっているのである。

しまった、パトカーだ。

思わず、海岸線の道路で時間をくったが、とにかくここをもう一度戻らなくてはならない。



時間がかかるのはしょうがないとしても、早く、コロンビア川の河口まで行かなくては。そんな焦りが少しあった。**Sekiu** という町を過ぎ、**Clallam** という町に通りかかったとき、ちょっとしたカーブがあり、ここを **40mile** で通り過ぎた。チョッと、スピードが出すぎかなと思い、バックミラーを見たら、なんと、後ろにパトカーがランプをつけて付いてきている。「しまった。やられた。」と観念し、車を道路脇に止める。ここは、何とかしなければ、と、お巡りさんをみると

綺麗な路肩の花。このときまではゆとりが・・・

若い優しそうな顔をしている。さて、さて、これからお巡りさんとの一問答。

お巡りさんが、止めた私の車のところに来て、やおら、「スピード違反。**40mile** でカーブのところを走っていたが、分っているのか？」

ここは、そのまますんなり認めては大変なことになると思い、

「否、私は、**40mile** は出していない。いつも、スピード違反には気をつけているし、今回、スピードは、**30mile** 程度だ。間違いない。」 と言い張る。

お巡りさん 「否、私は、自分の目で見ている。あなたは確かに **40mile** だった。」

私 「そんなことはない。私は、常に、五マイルオーバー以内で、注意して走っている。」

お巡りさん。 「お前は、なんの目的でここに来たのか」

私 「アメリカの自然を見ることと、文化を理解しようと、アメリカ中を走り回っている。今回も、この近くのインディアンのリザーベーションに行っ

て来た帰りだ。そして、アメリカの歴史、とりわけ、Lewis と Clark の探検をよんで、その探検のあとをトレースし、それを日本に帰ったら紹介しようと思っている。その翻訳もしている。」

お巡りさん 「分った。分った。ところで、この車は誰のものか？」

私 「会社のものだ。私は、いま、アメリカで働いている。」

お巡りさん 「どんな仕事か？」

私 「会社の経営のコンサルタントと技術指導をしている。」

お巡りさん 「分った。免許証を見せろ」

私 「・・・・・・」

お巡りさん 「Mr. Suzuki、今回は、注意だけで結構です。スピードには気をつけて旅をしてください。」

というわけで、実は今回、無罪放免にしてもらいました。普通なら、ここで、もし言い分があるなら裁判所に来いと言われてそのまま切符をきられることになる。裁判ともなれば、指定された日にワシントンまで呼び出されるというわけだ。そんなことになるなら、すんなり認めて、罰金を払ったほうが安上がり、観念するのである。それを見逃してくれたこのお回りさん、なかなか粋なところがある。それにしても、これは、まったく Lewis と Clarkのおかげと感謝、感謝。今でも思い出すと、自分でもよくも図々しく、スピードを出していないと言い張ったものだと、感心するやら、反省するやら。まあ、これもいまになれば楽しかった旅の思い出です。

Cape Disappointed

というわけで予定外の時間がかかり、どうもこの調子では、Interpretative Center の閉館までに付き添うもない。それでも、行けば何とかなるとの思いで、101 号線をひた走る。ここはアメリカ大陸の西海岸。海の向こうは日本との思いを抱きながら、草原の中を南に南に。道路の脇には、Blazing Star といわれる紫色の花が群生して咲き誇り、これが道中を楽しませてくれる。なかに白い花も咲いていた。これがまた清楚な感じを与えてくれる。この花の花言葉は何なのだろうと想像したりする。調べてみたら、この花、和名を「槍の穂」というのだそう。花言葉は、「燃える想い」、「高慢」となっていた。



こうして、時間は過ぎていたものの、はるばる来たぜ、オレゴン 思わず、「やったぜ。」

何とか Lewis and Clark Interpretive Center に着く。すでにしまっていたが、外の展望台には、番の鹿が出迎えてくれた。

おお、こここそ、Lewis と Clark が、そして、あのインディアンの娘 Sakagawea が数千マイルもの苦難の旅をして辿りついた太平洋の海岸だ。そして、私をとうとうここまできたのだ。もう、これは、Lewis と Clark を信望するものにとっては最大の感激です。しかも、ネブラスカから車でここまで来たとなるとこれは、一つの勲章といってもいいでしょう。誰もいないことをよいことに、思わず、「やったあー」の歓喜の声。そして、少し霧にかすんではいたが、確かに太平洋をバックに記念撮影。

さてさて、これだけの感激があるのに、どうしてここが、「嘆きの岬」と名づけられたか、それが不思議なのです。その理由は、Journey of the Corps of Discovery のなかにこんな風にかかれています。

およそ、3 週間のあいだ、嵐と、そして、岩と流木のなかの高波のために足止めを食らった。彼らは、川の河口近くで、そこは、彼らが大分水嶺を越えて見に来た海岸線からほんの 2・3 マイルのところであったが、そこで相談をしていた。それは、“私が経験したことでは最も不愉快なものであった。”と Clark は記録した。“私は狩にでて、もっとよい状況に戻ることもできなければ、また、前進することもできないその海岸、湿気に対して忍耐の限界に達していた。”と。

食料と——Jefferson が彼らに渡した信用書を使い、品物を手に入れるつもりでいたが、そのような船を捜しにいくつかの先遣隊が出かけた。それらの隊員たちの中で、——全部の派遣団のおおよそ半分程度であったが、実際に太平洋の波を見晴らすことができる岬にたどり着いたのはたったの一組だけであった。

我々の指揮官は、船を見つけることができなかったこの岬に、「落胆の岬」と名前をつけた。

Joseph Whitehouse

Lewis たちは、ここで、海伝いに西海岸に来ている様々なアメリカの艦隊をみつけ、彼らから食料を手に入れることができると考えていたのである。ところが・・・、現実はいかにかけ離れたものだったわけだ e

こんな彼らの嘆きを思い浮かべながら、時間がおそくなったので、この地をあとにし、コロンビア川の河口に掛かる



コロンビア川の河口に掛かる橋 対岸がかすんでい
る

巨大な橋をわたり、Astoria に向った。また、この橋が凄い。何しろこの河口が、5mile くらいある。そこに掛かる橋は、船が上流の港町に陸揚げするために通過できるよう、一部だけが高い橋げたになっている。まるで、橋が幾つも連なっている感じだ。なにせ、内陸の港 Portland までは、100mile ある。さらに船はそこから、200mile くらい遡った町、Kennewick やさらにその上流の Yakima 辺りまで行っているであろう。この川の揚々たる様は、まさしく、アメリカの母なる大河の感がある。



このコロンビア川に沿って、この日の Astoria の街角で ここは歴史のある町 宿泊地 Portland まで。夕暮れの 30 号を西に東に向かった。ひょっとしたら、St. Helens が見えるかもしれないなどと考えていたが、時間も遅く、とてもそんなゆとりはなかった。

Seattle -> Tacoma -> Bremerton -> Neah Bay--> Queets ->

Amanda Park -> Humptulips -> Aberdeen ->

Raymond -> Cape Disappointed -> Astoria -> Clatskanie -> Longview

-> Portland

この日の走った距離は、604mile でした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

七日目（ 7月3日 ） Portland to Medford

昨日は、欲張りすぎ。疲れがたまり、これでは折角のドライブも走っているだけ。この日は反省して、ゆっくりと七時に出発。時間を見ながら、宿には早くつくつもり。

それでも、ポートランドの街中を見ないわけには行かない。混んでいることを承知で、ビジネス街に行く。なんと、このまちの中心は小高い丘の上にあった。また、大学の町か、なんとなく、若い学生の姿がやたらと目に留まる。町中の半分歩行者天国になっているような道で、一方通行の道が半分に割れている。真ん中に花壇のようなものがあり、前が使えていたので、右の車線から左の車線に変えたら、後ろから来た自転車に「危ない」といわんばかりに叱られた。まさしくここは自転車天国なのである。そうした自転車通勤か、通学のための駐車場がしっかりしていて、その入り口に自転車が吸い込まれるようにして次々に入っていく。これなら、町の排気ガス公害にも貢献するというわけだ。とにかく、



ポートランドのセンター街

車は多い。一方通行では、なかなか進めないものにとっては、厳しい交通事情。でも、こんなものかという程度に街中をドライブし、早々に海岸に向かう。



ポートランドからオレゴンの海岸までは、100mile 近くある。海岸線に沿って小高い丘が連なっており、このためこのポートランド辺りの気候が穏やかになっているのだ。途中にあった工業団地の中の会社。前庭にジェット機が飾られている。シアトルにはボーイングの工場もあるくらいだから、この辺りに航空機の部品メーカーがあっても不思議では

ない。

ギョッ。戦闘機だ

Lincoln City という町あたりからオレゴンの
海岸にでる。が、これがまた、霧のなか。水

平線が何も見えないという状況。これでは、太平洋の息吹を感じることができない。それにしても、この霧は何だ。まあ、これまでの天気がよすぎたこともあり、ここに来て、この霧も仕方がないと諦める。でも、この霧、ワシントンからずっと、この海岸に沿って発生しているのだ。これがこの辺りの気候なのかもしれない。とにかくここは、親潮がオホーツクまで上がり、ここで十分に冷えた海水が南下してきているのだから、海の水が冷たいのだ。インターネットで調べてみたら、次のような説明があった。

〈発生のメカニズム〉

地表面付近にある空気塊が冷えると、空気中に含まれている水蒸気は飽和状態に近づく。さらに冷えると、ついに飽和状態を越えようとする。空気中にはほとんどいつでも十分な数の凝結核があるので、そのようなときには凝結核を芯(しん)として微水滴ができる。これが霧である。地表面付近の空気が冷えるのは、

- (1)陸地の表面が夜間に熱を放射するとき、
 - (2)暖かい空気が冷たい海面に流れてきたとき、
 - (3)斜面を空気が上昇して断熱的に冷却するとき、
- の3通りがある。

というわけで、まさしく、この霧はこの辺りの海流の冷たさによるものであろう。ということか、ここではいつも海水が温まるまでは霧が大発生しているということか。なら、南にいけば、きっと晴れているはずと南へ南へ。

見えました。見えました。あれが太平洋です。

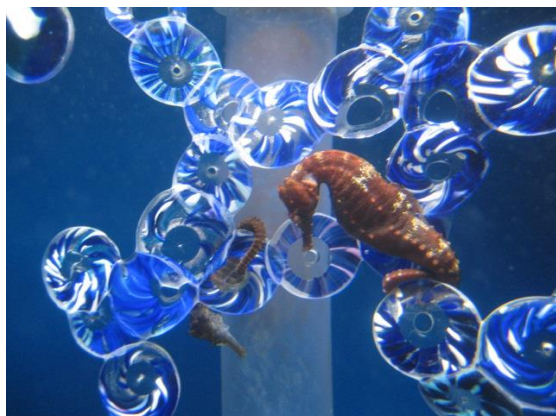
この海の向こうにはあなたがいる・・・なんて、すこしセンチになる。鼻のした何センチかって。馬鹿を言っている場合ではない。

ここは、海岸線に沿って沢山なステーツパークがあるが、車の道から海岸線までは随分ある。それだけ、海の風が強いということか。それでも時々、海岸線が顔を出す。展望台のようななつたところで車を止め、海を確認する。すると横にあった看板に、このオレゴン海岸は、よく津波の被害を受けるところとの説明があった。ここには、1700年に大きな津



愛車よ。あれが太平洋の波だ。

波が来て大被害を被ったとか。その時の波の高さが 50 フィートとあったから、物凄いものだ。アメリカの西海岸は、海底火山の直ぐ脇にあり、しかも、ここは海底が隆起する地震が多いので、こうした津波の被害が起こるものと思うがいかなものだろうか。その荒くれ太平洋に霧が発生していたが、これをバックにまずは記念撮影。そして、折角ここまできたので、オレゴンの海を紹介している水族館に入る。South beach という町にある Aquarium だ。この水族館最初は空いていたが、かえるときにはいっぱい。なかなかの人気の場所のようだ。そのわけが中に入って分った。



人気もの、龍の落とし子

ここがなかなかユニーク。というのも、子供たちが水槽のなかに手を入れて、なかで泳いでいる魚に触っている。触るたびに魚はびっくりして泳ぐが、これがなかなかたのしい。子供たちはたちまち魚と友達になった気分だ。嬉しくて、お父さんに教えている子、係員に仕切りに質問をしている子、こちらでは、こんなことが極当たり前に行われている。どこの公園、ナショナルパーク、ビジターセンターなどでも、よくあるサービス。何でもかんでも触ってはいけないでは、子供にとっては実感がわからないのである。体感教育の大切さをしみじみと感じた。

展示物の一つに、このオレゴンの海岸で二時間の間に浜で集められたガラクタの展示があった。たたみ二畳くらいのパネルに、これがまるで芸術品の如く飾られていた。ペットボトルや、その蓋、サンダル、それに、子供のおもちゃなど、色とりどり。しかし、それにしても多種多様のものが海岸に捨てられている。これは、回りが海に囲まれて国では、是非、こうした美化運動を推進してもらいたい。

ここの土産物のカウンターで、ネブラスカから来たといったら、洪水は大丈夫かと心配

入り口の受付のおばさん。ここで切符を買う。が、ただ、切符を売っているだけではない。ここは初めてかと聞く。もちろんだ。というところこの水族館の見方を教えてくれた。とにかくサービス精神がよいというか、本当にここに来てくれてありがとうといわんばかりに親切に面倒を見てくれるのだ。こんなところを、商売至上主義のどこかの国の施設には是非とも見習ってもらいたい。なかにはいると陳列されているものはとりわけ変わってはいない。が、カレイの泳いでいる水槽、



これが文明の落とし子

していた。ネブラスカすこし高い丘陵地帯だから大丈夫だといったら、自分の友達がいるのでとても心配しているといっていた。このところアメリカは以上天候続き。ミシシッピーやミズーリ、それに、オハイオ川などの流域で大洪水が起きている。とにかく、海岸までの距離が長いのでなかなか水の行き場がないのである。一度洪水になると、万ナイルという幅で、平野が湖化してしまう。そんな経験をインディアナにいたときに経験したので、きっとこの人もそんな状況を心配しているのだろう。



こんな太平洋に憧れて来ました

なかなか見事な海岸だ。

これで気分をよくして、できれば、カリフォルニアまで足を伸ばそうと思ったが、海岸線の道は意外と時間がかかる。浜辺まで降りたいと思ってもなかなかそのチャンスがない。そこで、**Bandon** という町で見つけたステーツパークに車を入れる。ここに **Coquille Point** という浜辺があり、階段をつかって浜辺まで下りてゆけるようになっていた。といっても、その階段、五階建てのビルくらいあ

る。浜辺までがなかなか遠い。でも、ここまで来て太平洋の水に浸からないわけにはい

かない。というわけで、霧にまみれるような海岸まで降りる。ここは、丁度、岩が波をさえぎるように囲んだ砂浜で波の高さはそれほどではない。打ち寄せる波も時々は威勢のよいものもくるが、穏やかそのもの。ここに、自動シャッターをセットし、波に浸かる姿を写真に撮ろうとしたが、そうはうまく問屋が卸さない。シャッターが切れる瞬間には水が

南に南にと車を進めたがなかなか霧は晴れない。**Cape Perpetua** というところにあるビジターセンターによる。ここはなかなかの絶景、ということなのだろう。となんとここに来た途端に霧が晴れた。雲ってはいえるものの、太平洋の水平線がしっかり見える。思わず、おーいっ、と声をかけたくなるこの景色。ここからはオレゴンの海岸線がどこまでも続いているのを見ることができる。と、写真を撮っている間に太陽さえ顔を出してくれた。海には白波が映えている。



浜辺に下りる階段

引いてしまうのである。まあ、何枚がとったなかに、偶々、思うようなものがあればよいと、ここは 1 人芝居を繰り返す。この浜辺に打ち上げられた材木の多いこと。オレゴンの山から川を流れてきたものが海にでてここに集まったものであろう。その多さにびっくり。



太平洋の水は冷たかった。 私の気持ちは燃えていた

なかには、磨けば飾り物の売り物になるのではと思うような立派なものもある。そこで、私はサンダルをつり下げるためには、小さな棒を一切れ拝借。いい記念品である。

こんなことをして、太平洋の水の感触を味わう。とにかく、冷たい。北のオホーツクで冷やされた海水だからだ。それに、ここも霧がものすごく、これ以上になると海岸で道にまよってしまうのではないかと思うほど。とにかく寒い。こんなことをして、浜辺で時間を費やしたおかげで、カリフォルニアまで行くのは断念。

ここから Green という町にでて、今日の宿泊地 Med Ford に向う。これで、オレゴンの海岸ともお別れ。少し淋しい気もしたが、まだ、この先、旅は長い。ホテルには、やや早めに到着というわけで、ビールを飲みながら、洗濯をし、この日の反省。

430 マイル。やっぱり宿にはすこしはやめに到着するのがいい。

Portland --> Lincoln City --> Newport --> Florence --> Reedsport -->

Lakeside --> North Bend --> Coos Bay --> Bandon --> Coquille -->

Green --> Grapts Pass --> Medford

俺、今度オレゴンに行くんだ。

八日目 （ 7 月 4 日 ） Medford to Ontario

今日は、アメリカの独立記念日。ということで三連休の始まりです。行楽地は混むことが予想されますが、こちらの混む程度は日本の平日のようなもの。気楽なものです。オレゴンにきて、天気がさっぱりしませんが、今日も、どうも 1 日こんな天気かなというようなどん曇。この辺りまで海岸の霧が雲になって押し寄せてきているようです。予定では、今日は、山越えの日なのにどうも天気が思わしくない。まあ、これも、日ごろの不摂生のためと諦め、クレーターレイクに向かう。山

に入りかけたところから靄がますます濃くなってきた。クレーターレイクは、火山口が陥没してできたカルデラ湖で、ここがナショナルパークになっているのはそれなりに学術的な意味があるところということか。

Medford から、62 号線を走るが、ここがまたナショナルフォレストということで、物凄い密林。ハイウェイは高い林に囲まれ、上空が開けていないため、ナビが仕切りに、サテラ



この森が凄い ナビが効かない

イトが見つからないといっている。やっぱり知らない土地をナビなしで走るのは不安だが、この道は一本道なので、まあ、このまま進むしかないと腹をくくる。それにしても見事といおうか、物凄い密度といおうか、この密林、まさしく太平洋のもたらす水のおかげというような気がする。こうしてみると、オレゴンは湿気も高いし、緑も豊かで、なんとなく日本の山岳地帯を走っているような気になる。オレゴンが日本人にとって住みやすいといわれるのは、こんなところからかもしれない。



クレーターレイクナショナルパーク入り口

こうして、不安ながらも、案内を頼りに、クレーター・ナショナル・パークの入り口に到着。これで一安心と、ここ記念写真を撮ろうとしたら、蚊が凄い。たちまち、車の中に数匹が飛び込んでいる。血を吸う気なのだろう。直ぐ蚊にやられたが、今回の旅では、オリンピック公園のガイドに虫刺されのくすりが意外と役に立つと書いてあったので、蚊避けの高周波発信機と、虫刺されの薬を持参していた。これが実に正解。蚊に刺されてもそれほど気にならなかった。それにしても、この辺りの蚊は餌に不自由しているのか、動きが鈍い。簡単に手づかみで捕まえることができる。悠然たるところはいかにもアメリカの蚊といわんばかりである。



どこのナショナルパークもそうであるが、入り口にはビジターセンターがある。ここで、このパークのできた由来、つまり、地球の歴史のなかで、どんな風にしてできたかを照会してくれるビデオがある。また、案内をしているのはレンジャー達で、彼らは観光も案内もするが、本職は学術調査員で、専門的な知識をもっている。だから、なにかを質問すると

霧のクレーターレイク

それは丁寧に、解説をしてくれる。子供たちも、遊び半分ではいられないといった雰囲気がある。自然を大事にするとともに、自然から学ぼうという意気込みが感じられ、とても好感が持てる。だから、いつもこうしたビジターセンターによるとジオグラフィックな解説書に手が出てしまう。ここでも、ここその類の本を買ったら、なんと、クレーターレイクだけを紹介した小冊子を只であげるとプレゼントしてくれた。気を良くして絵葉書を買う。さて、出かけようとしたらなんとここにポストがあった。ここからはがきが出せると、

ということで、ためしに手紙を書いて投函。さてさて何日で日本に届くのやら。



あいにく、クレーターレイクに、たどりついたものの、霧のなかロッジ。先がほとんど見えない。勿論、湖なんてトンでもない。ということで、みやげ物だけ買って帰ろうと決心。

見えましたクレーターレイク

ところが、たまたまそこにシアトルから来ていた日本人の家族が、東に回れば晴れてますよ、とありがたい情報。その助言に従い、クレーターの湖の回りを集会している道、実はここは一周道路が閉鎖されていたが、東側までは何とか行くことができる。そして、なんと、数メートル先が見えないくらいのもう凄い霧だったのが、こちらに回ったら、湖が見えるではないか。これは、幸運。これがクレーターレイクかと、感激。丁度、富士山の頂上の火山口のように、凄い崖に囲まれて、そのなかに湖があるのである。この湖、なんでも水深はアメリカーといわれている。この魅力は、その湖の水の色とされているが、霧のなかで、その素晴らしさを十分に味わうことはできなかったが、幻想的な世界のなかのレイクもまたすばらしい魅力だ。



まだ、こんなに雪が

実は、この山頂辺り、標高が 2000m 足らずと、たいしたことはないが、地図では明らかに北国なのだ。雪渓が凄い。道路の両脇は、何と二メートル近く雪が積もっているのである。この雪の壁の間を時速 90 キロで走り抜けるのは少し勇気がある。でも、こちらの人はなれているせいか、そんなことはお構いなしに、びんびん飛ばしているのである。

この日の行程が長いことと、霧で、ここに何時まで居てもきりが無いということ、早々に山を下ることにした。予定で

は 62 号に戻るつもりでいたが、南に下る 31 号線にでるには、どうも 183 号にでたほうが近道ようだ。

138 号に出る道は、これが山の東側にあるせいか、ほとんど霧がなく、たちまち、晴れ模様。クレーターレイクの西側は霧だが、東側はすでに晴れている。自然のなせる技は不思議なもの。

この 138 号は、National Forest の境界線を走っている。それが、それこそ、線で書いたようにまっすぐなのだ。距離で 10 マイルはある。森を切り開いて道を敷設してあるのだが、両脇を森に囲まれ、前方は視力の届くところまで道路が繋がっている。これほど、単調な道はないと感心していたら、ところが、ここから南にいく、97 号線はもっ



と凄い。地図では、40mile くらいが真 **道路は続くよ、どこまでも。**

っ直ぐになっている。この辺りの自然か

ら考えると、これはあながち間違いでもないようだ。この 97 号線の途中、Silver Lake に向かう、ローカルなハイウェイに入るが、これが、Klamath Bay という湿地帯。ひとつの盆地が大湿地帯なのだ。水はところどころにしか見えないが、広大な緑の平原のしたが湿地帯になっている。勿論ここではプラントをすることはできない。せいぜい、渡り鳥が羽を休めるためにここに群がるのが丁度よいくらいだ。とにかく、広い、湿原がどこまでも続くと、この水はいったいどこから来て、どこに行くのか想像も付かない。この南に Klamath Lake というのがあるが、ここに川が流れ込んでいるが、流れるといふよりもその湖の一端がここまで延びているような感じだ。

逆に Silver Lake は、地図には Dry Lake と書かれているので塩の湖を想像していたが、ところがこれが、大草原なのだ。かつてはここに水が豊かにあり、大きな湖が周りの農場を潤していたに違いない。との流れか、いまは渴ききっている。



ところが、アメリカはすごい。その南に **Klamath Bay**

ある Summer Lake は、水が豊富にあったが、これがどんどん干上がっている状態。湖の辺の砂地がどんどん広がり、ここが白くなり始めている。その砂地のところに何本も湯気



Summer Lake

が立っている。これが砂埃でないことは、その筋がはっきりと、以下も何本も立ち上っているから、直ぐに分かる。まさしく、どんどん水が蒸発しているという表現がぴったり。そんなことを考えながら 65mile で走っていたら、なにやら全貌に人影のようなものが道路の上に確認された。まさか、ここをサイクリングしているわけではあるない。それにしても、車が近づいてもよけようとししないのだ。

あと三十メートルくらいのところでこれが野生の鹿だということがわかった。

おいおい、何とかしてくれよ、跳ねてしまうぜ。と最初はノンビリ構えていたが、とうの鹿のほうに興奮して、右に行ったらよいのか、左に行くべきかまよっている。動かないのである。仕方なく、クラクションをならして脅してみると、やっと道路わきに退いてくれた。危うく数十キロも有る鹿を跳ねるところだった。ここは少々驚かしても仕方あるまい、と言いつつ。



Abert Lake

中に突然の湖。赤茶けた崖のしたに満面の水をたたえた湖だ。こんなところにアメリカ人が水上スポーツをやらないわけがないのだが……。それが、ここが、死の湖なのである。すぐ下に砂漠があるのにそこに水が流れ出していない。なんとも不思議な湖。ところが、北に進むにしたがってここが、どんどん Dry Lake 化していることがわかった。凄い、塩の大平原があったのだ。アメリカは、となりは緑豊かな草原であっても、峠一つ越えれば、そこには全く別の世界、乾燥しきった砂漠のような大地が開けている。自然とは書くも厳しいものかと、つくづく考えさせられた。

ちなみにこの湖について紹介しよう。



Abert Lake も塩が凄い

Lake Abert は、オレゴンの南部中央地区に位置しているハイウェイ 395 の西側にある

lakeview の北 30 マイルのところにあります。

オレゴンでも最も大きな湖で、水の排出先はありませんので、水が減るのはただ蒸発する以外にはないのです。その結果、炭酸ナトリウムやその他の塩分がこの湖の水の中に濃縮されているのです。岩が白くなっているのは、アルカリ性になっているためとご理解ください。この白い岩の上にある湖岸の線からそれがわかると思います。**Abert Rim** という崖の縁が北から南に 30 マイルの渡って延びています。この **Abert** 湖の広さは、60 平方マイルということになっていますが、毎年の塩の析出量によってこの数字は変化しているのです。今から、140 年ほど前にはここは完全にドライレイクになっていました。この標高は、6250 フィートです。そして、オレゴンにあるほんの一握りの雪千鳥の生息する島のひとつとなっています。秋の渡り鳥の時節となりますと、一万羽以上の大群のカイツブリ、ヒレアシシギなどがやってくるのです。

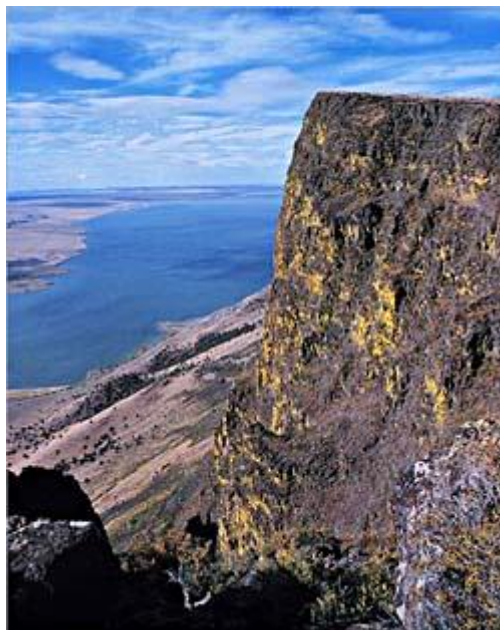
Abert Rim というのは、1/4 マイル以上の高さを持ち、**Abert** 湖よりも 2000 フィートも垂直にそそりたった断層で、その長さは、30 マイルにも及んでいます。これは、北アメリカにある露出した断層の中でも持っても長いもののひとつです。そして、この断層は、およそ数百万年に起きた断層の隆起によってできたものです。(それは、僅か、30 分の間に起きたことが、この湖の北の地域から分かります。)

この湖と断層は **Lt. John Fremont** により 1843 年に、かれの隊が伝説の **Buena Ventura** 川、この川は **Klamath** 湖から、サンフランシスコ湾に流れていると思われ邸他のですが、その川をさがしている

ときに発見されました。**Fremont** はこの湖と断層に、かれの探検隊の指導者である、**J.J.Abert** にちなんで、この名前をつけたのです。断層は、この **Abert** 湖の湖岸に沿って 19 マイルも真っ

直ぐに伸びています。そして、800 フィートにも及ぶ火山層を被った平地の上に 2000 フィートの高さで立ち上がっているのです。傾斜面は全くの垂直で、これは、世界でも最も高い垂直な壁のひとつとなっています。

この途轍もない景色にびっくり仰天し、後ろ



髪を引かれる思いで、この塩の湖をあとにした。峠を越えるとそこがバレーになっている。

ここも、塩が凄い

とにかく広い。途中にレストエリアがあり、一休みして、写真など撮っていたら、案内板

に、ガラガラヘビに注意とあった。写真を撮るために何の気なしに砂地に足を入れていたが、これは危ないと、ひやひやしながら早々にここを退散。

バレーのなかはとにかく、まっすぐなハイウェイ。70 マイルを出していても回りの景色が動かないのだからスピード感はない。

と、突然、また、湖だ。しかも、湖岸はすでに白色化、つまり、塩が堆積している。アルカリレイクとある。湖がアルカリ性なのだろう。ハイウェイは、干上がった湖の跡らしきところを走っている。と、なんと、そこに



ここも見事な塩の湖でした

つむじ風が起きているではないか。たいした大きさではないので、あまり気にはならなかったが、乾燥しきったここではトルネードはないにしても、竜巻は起こるのか、と改めて認識。



術そのもの。その変化がものすごい。

こん乾燥した半分砂漠のようなところを 90mile 走り、オレゴンの真ん中を横断している 20 号線にでてガスを補給、これでまずは安心と気分をよくする。Juntura という町から、20 号線は Malheur という川と平行して走っている。これがまた、岩肌むき出しの山の間隙を縫って流れている。こちらでは当たり前ののはげ山。風水で削られた姿はまるで自然の芸術そのもの。その変化がものすごい。

この日の宿泊地、Ontario に近づいたところで、ハイウェイの脇に異様な姿の山が出現。その姿、そして、独立峰であるのでかつてはオレゴントレイルの道しるべになっていたそう。この山、Malheur Bluff と書かれていた。火山でできた山で、この山がスネーク川を堰きとめこの一帯を潤していたようだ。おお、それにしても、グランド・テトンでみたあのスネーク川



がここを流れているのかと思わず感激。

Med ford --→ Union Creek --→ Crater Lake ---→ Diamond Lake J.

----→ Silver Lake ---→ Valley --→ Alkali Lake --→ Riley ---→

Burns ---→ Juntura --→ Vale --→ Ontario

この日、走った距離は、510 miles でした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

九日目 （ 7 月 5 日 ） Ontario to Salt Lake

毎朝、体の節々が痛く、疲れが溜まってきているのを実感。この日は、Ontario から、カウ
ンティのハイウェイを走って、途中寄り道をしていくつもりでいたが、どうも、時間的に
これでは 10 時間以上のドライブになるだろうと、ここはフレキシブルに変更、インタース
テーツを使い Twin Falls に向かうことにした。アイダホの南を走る I-84 はちょっとした山
岳地帯を走っている。でも、ハイウェイは
真っ直ぐだ。峠を越すと前方には限りなく
広いバレーが出現する。この繰り返したが、
峠のたびにそのあとにどんなバレーが出
てくるのか、そこを通る初めての者にとっ
ては胸をわくわくさせるのである。

Twin Falls の町は、その名のとおりに滝を
中心に発展した町であるので、インチス
テーツから少し離れている。町に入ると直
ぐにビジターセンターがあったのでここ
に何気なしに立ち寄った。そして、駐車し

てみてびっくり。なんとここがスネークリバーの溪谷の上にあった。そして、ここに来る
ために渡った橋は、なんと、橋げたのしたが百メートルくらいはあるような高さだ。ビジ
ターセンターの横で、なにやらパラシュートのようなものをたたんでいる若者達がいた。



ここから飛び降りるんですって



凄いでしょ。とにかく素晴らしい

そうなので、彼らはこの端からキャニオン
に飛び込むのである。それくらい魅力的な
橋なのだ。そしてこの橋からこれまたどこ
まで行くのかと思うくらい果てしなく溪谷
が延びている。お目当ての Shoshone Fall
は、滝なので、町なかというわけには行か
ず、この場所から数 mile 上流にあった。ま
ずはここを尋ねることにした。

Shoshone Falls これは、岩でできたまさ

しく天然の芸術品といたい。造れといってもできない自然の名作。滝口は岩盤が削られたもので、高さが町々だ。その高さにより、いろいろな形の滝が流れ落ちているのである。幅の広いもの、滝が何段にも重なっているもの、そして、岩の途中から湧き出たように流



この迫力が凄い これ実感

れ落ちているもの、これがうまく調和され、一つの滝となっている。おっ、虹が。しかも、二重の虹だ。これは、この時間でないとできない演出。二時に来たのでは、ただの滝に過ぎない。Twin Falls というので、滝はもう一つあるのだが、ここは車で行くことはできず、トレッキングをするようになっている。男性的な岩を削り、ここに、自然の力のすごさを感じさせる水しぶき一杯の水が落ち込む、そして、真っ白なしぶきと、これに映える虹、

こんな素晴らしい情景を見て興奮しないわけがない。偶々、コースを変えてここに来た幸運に感謝し、アイダホから、93号をネバダに向かう。ネバダに近づくに従い、荒野が荒れていくのが分る。このあたり、インディアンのリザーベーションではないが、それでも、こうした荒野にひっそりとくらしている人がある。インターステーツの周りは、農場が開拓されているが、カウンティーハイウェイの、そのまたローカルな地方がインディアン達の落ち着く場所になっているのがよく分る。

このあたりは水系はよくないが、それでも、細々と流れるクリークのまわりに農場が広がっている。これがインディアン達に残された生活の場の現実なのである。

州境にとてにぎやかな町が突然現れる。カジノの町である。荒れ果てた荒野の真ん中に、ハイウェイの回りにだけネオンで飾られた色鮮やかな建物がたっている。これだから、驚く。それにしても、昼間から駐車場が満杯なのは、この日がウィークエンドだからなのか。



あるのは、カジノだけ

ネバダに入り、ここは制限速度が 75 マイルに変わった。モンタナと同じ制限速度だ。地図ではさほど大きく感じない州だが、事実とはんでもない広さなのだ。州の広さと人口密度に応じて、州により制限スピードが違うというのがいかにもアメリカらしい合理性である。

インターステーツ I-80 にでる。懐かしい。このインターステーツはネブラスカまで続いているのだ。でも、リンカーンに戻るには、あと二日あとだ。

ネバダからユタに入るその州境に、地平線を眺めるポイントがあるというので、インターステーツを降りる。West Wendover という町だ。このまちに入るすこし小高い峠を越えたところで、目の前に異様ともいえる塩平原が出現。その不気味な世界に愕然。とにかく、バレー全体が塩の世界だ。どこまで続くのか、果てしない地平線まで行っても、まだ、



塩の平原が続いている。まさか、まさか、これが Salt Lake Desert か、と、

何だ、あの前方の白い筋は？

その実態を見て驚愕。なにせ、言葉では説明しがたいような塩の海である。どこまでも続くこの塩の平原は、結局、インターステーツをやく一時間ほどかかって走り抜けることになった。40 マイルあった。でも、そのあとも Desert は、まだ 40 マイルくらい続いていたのである。



これまで、ネバダのあちこちで、あるいは、昨日は Summer Lake, Abert Lake で塩に感動していたが、ここは、そのスケールが違う。ここを走らずに、Dry Lake がどうのこうのというのは、おこがましいという感じ。

世界中、塩だらけ。どうでしょうか

ああ、この塩は、どうしようもないなんて、しやれを言いつつ、この日の宿、Salt Lake につく。

ネバダとユタの州境には、ここも例により、大



ハイウェイは、塩の中をはしる

きな娯楽の町、カジノシティーがある。両方の州にあり、ともに栄えているから、なんとも不思議な世界だ。それにしてもアメリカ人はカジノが好き。



おっ、大丈夫かよ。 牽引車でした。

ら彼らの価値観が、アメリカ人のなかでは一番合理的なのかもしれない、そんなことを痛感した次第。

アメリカをドライブしていると、これだけ自然が豊かというか、われわれ通常感覚では理解しがたいような自然の造詣を体験することができる。勿論、解説書やマスコミの紹介なので、それを知ることにはできるが、これは実際に見るのと、聞くのとでは大きな違い。見て、どうしてと感じて、初めて自然の偉大さを知ることができる。そんな意味では、アメリカ中をはしり回っているトラックの運転手が一番こうしたことを身に沁みて感じているのではなかろうか。ひょっとした

Ontario --> Twin Falls --> Jackport --> Wells -->

West Wendover ---> Salt Lake City

この日の走行距離は、492mile でした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

10 日目 （ 7 月 6 日 ） _Salt Lake to Cheyenne

もう一つのバッドランド

懐かしい Salt Lake の町。ここはモルモン教の大聖地。昨年の夏にデスバレーに行く途中でここにより、とっぷりと見学したので、今回は特に時間はとらなかった。それでも、世界に名だたるテンプルスクウェアぐらいは見ていこうと、朝の町をドライブ。写真を撮ろうとしたが太陽光線のムキがどうも悪い。いい場面を撮ろうとしたら逆光になるのだ。でも、前に随分苦労をしたせいか、町中の様子はわかっている。難なく一方通行の道をうまく曲がり、難なく思い道理の場所に着く。



テンプルスクウェア

前回見学したときには、日本から来たという信者の方が親切に、今度はユックリ

と聖書の話しを聞くくらいの時間を持ててきてくださいと言っていた。彼女たちは世界中から集まっている聖女たちなのだ。その彼女たちが朝の出勤。そんな光景をみながらテンプルを一周したが、最近では、聖堂の回りの新しい建物に圧倒されて、なにか、町中の教會的な雰囲気になってきた。随分人口も多いようだし、ネブラスカとは違うので、趣のある建物がだんだん肩身の狭い思いをして来ているのだろう。文明の波はここまでもやってきているのかという感じだ。



エコーキャニオン

ご存知のように Salt Lake は、2002 年に冬季のオリンピックが開かれた町。そんなことを

裏付けるかのように、町からそう遠くないところに雪山が見える。ナビのおかげでこの Salt Lake の町を通り抜けるインターステートをうまく走ることができた。ここには、南北に走る、I-15, I-84 そして、東西にはしる I-80 が交差し、ランプが多



いので、田舎ものにはなかなか難しい道だ。地元では **Eisenhower Hyway** といわれる **I-80** をワイオミングに抜けるには峠がある。この峠を下ると突然ハイウェイの横に湖が出てくる。山の中の湖は回りの景色に湖面がその姿を映しなかなかの光景。そして、その直ぐ先に **Echo** という町がある。ここは両側が崖のキャニオンになっており、確かにこだまが反響するような土地柄だ。

峠を越えるとこれだから、凄い

ここをモルモン教徒が苦難の山越えをした説明がされていた。まさしく、**Salt**

Lake にたどり着く最後の難関だったわけだ。今でこそ、風変わりな岩の形はドライバーの目を楽しませてくれるが、この山道を、幌馬車を引っ張りながら越えていった当時の苦労は、それはまさしく神が与えた試練と思わなければ乗り越えることはできなかったのではなかろうか。

ワイオミングに一端は行ったが、**Lyman** という町から直ぐに、また、南に下がり、もう一度 **Utah** に行くことにした。ロッキーを越えるのにインターステーツをはしったのでは面白くないとの魂胆である。実はこれが大正解。かつて気ままな一人旅のいいところである。というのは、やがてハイウェイは、風車が立ち並び、その遠くにユタの山々を望むことのできる **Mountain View** という町に入るが、実は、この町から **Manilla** という町に行くまでのハイウェイの両側が、まるでここにバッドランドが引っ越してきたような雰囲気風景である。火山灰が堆積してできた丘が、何万年という間の風雨によってきずられたかのごとき、奇怪な形をした岩肌の山が延々と続くのである。



えっ、こんなところにもバッドランドがあるのかと、思わず口にする。考えるに、こうした地質の場所がアメリカには広範な地域に渡って分布しており、これが、長い歴史の間の侵食で同じ様な光景の山々を作り出しているのだ。いかにも、こんなものはどこにでもあるさ、と言いたげに目の前に展開していく景色を追いながら、やがて、このハイウェイは、ユタに入ると 43 号線に変る。そして、ここにはやがてコロラド川に流れ込む川をせき止めてできた **Flaming Gorge** という湖に出る。この日が三連休の最終

うっ、ここにもバッドランド これだから、凄い

日ということで、ここでレゾートを楽しんだボート族が帰りの途につくというので、反対車線は例により、レジャーボートを牽引する車が数珠繋ぎだ。ところが、これだけ車の量が多いのに道路は渋滞しない。まことに不思議な感じがするが、それもそのはず、ここには信号がないから、とにかく車はどんなに混んでいても走っているのである。日本の道路の渋滞も、車が多いのではなく、信号があるから渋滞することを、道路行政に

預かる人はよくよく考えて、その対策を取って欲しいものだ。

この湖をあとにし、もう一度峠に差し掛かったところに、**View Point** があるが、ここからみる湖の光景は、まさに、キャニオンがどのようにしてできるかを容易に理解できるような光景。三百メートルくらい高い崖に挟まれて、この湖ができていたのである。崖には、まさしく地球の歴史の教科書といわんばかりに、何層、何十層という地層がそれぞれ独特の色合いと暑さでその断層を見せてくれている。地質学を



この道を 60 miles で

学ぶものにとっては、これまた興味の尽きない光景である。また、崖の右側と左側では、岩肌の侵食のされ方が違うし、地層の堆積の仕方が全く違うのである。どうしてとんでもうまく説明が付かないから、ますます興味が湧く。こんな発見があるから、アメリカのドライブはやめられないのである。

この山越えをしているときに、オートバイでツーリングをしている連中に会う。四台のオ



ートバイを 5 人で乗り分けている。そのう

まさしく地層の標本

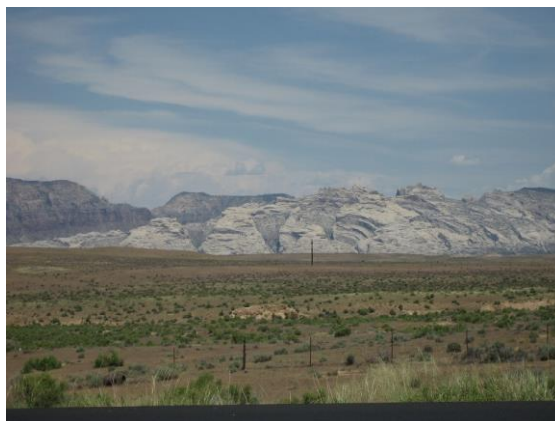
ちの 1 人は、ヘルメットも被らず長い髪をなびかせている女性だ。なかなか格好がいい。こうしたオートバイでツーリングをしている連中は、こちらでは本当に行儀がいいと感心する。制限スピードはよく守っているし、追い抜きなんて滅多にしない。そして、十分な車間距離をとり、道路が混ん



誘導してくれたオートバイ野郎たち

でいても、乗用車とおなじように順番が来るまでしっかりと列を崩さずに走っている。そんなことをよく知っているのも、ここは彼らに先を譲り、そのあとをゆったりとした気分ですることにした。こうして、四台のオートバイに先導されてのドライブとなった。露払いとでも言おうか、こうして先導されて走るのもなかなか気分がいい。山道は、カーブがあり、また、時には起伏があつたりでなかなか変化があり、それだけでも楽しいが、彼らと一緒に走り、時に、ビデオを撮ったりして、暫くのあいだ結構楽しむことができた。

Vernal という町から、40 号線に入る。この道は、デスバレーに行くときに、西の向って走ったことがある。しかし、反対向きに走ると全く印象が違うから楽しい。地図には、この辺り、Dinosaur の化石の出土で有名なところ。コロラドに入ると、Fossil Monument があると案内されている。これはなにかの記念碑でも建っている



のかと思いきや、なんと、それは実は山だった。最初は遠くから見て、なんとなくおかしい格好をした山だな、くらいにしか思わなかったが、よくよく見れば、これがよく見る化石の発掘現場というような雰囲気のある山。一山どころか、これが連なってこんな形をしている。大きすぎて、実感が湧かなかったのだが、遠くに離れてみると確かに、これは異様な形の山だ。その名前がついたのも、その形をみれば納得という具合。思わぬ発見は、してやったりとばかり、少々気分をよくする。そして、Craig という町から、13 号線に入り、北に向う。実は、この日の宿泊地は Cheyenne。ここに行くには、もともと I-80 をそのまま走っていけば、難なく着くのであるが、これでは、折角、アメリカ大陸の分水嶺を越すのに面白くないと、一端南に下がり、これまで走ったことのない道を山越えしようという目論見。ちょっと、1 人で走るにはリスクもあるが、それだけになにか発見があればとの期待も大きい。

Interest Point って何だ。

13 号線は、コロラドからワイオミングに抜ける縦断路でもあり、交通網としては重要なハイウェイであるが、ここを北に向って走っている車は私 1 人しかいない。少々心細いところもあつたが、夏の日長いということで、まあ、ユックリドライ



何だ、これは

ブを楽しむことにした。と、突然、道路脇 Interesting point という看板が目飛び込んできた。こんな日様式を見るのは初めて。一体何のことかなと思いきや、この標識と反対がわの広々とした農場の真ん中に、これはまるで、魚の背びれのような格好で岩がニョキニョキ飛び出しているのである。「うわー、何だ、これ。」といった具合であっけにとられて



牛さん、牛さん どいとくれ

牛だ、跳ねてしまうぞと、一瞬、肝を冷やす。山道とはいえ、こちらは 60mile で走っているのだ。普通なら、ハイウェイにはこうした牧場の動物が紛れ込まないように柵がしてあるのに、ここは、もうそんな車が主体の土地ではなく、ここの主人公は牛なのである。こんなところで、牛が興奮して車に体当たりでもされたら大変と、まさに緊張の一瞬。牛達も、こんなところに車がくるのは珍しいと見え、数十等が一斉にこちらを向いているのである。これには、少々平行。たのむから、そこを退いてくれの気持ちでノソリ、ノソリと車を動かし、牛との距離、僅か 2・3 メートルといったところを走り抜ける。「ああ、無事でよかった。」と胸を撫で下ろす。この道、やがて Battle Pass という峠に差し掛かる。ここが、大陸の分水嶺である。標高は、9955 フィート、3000 メートルの高さだ。回りの山の頂には雪が残っている。記念に分水嶺の両側を向いて写真を撮っていたら、一瞬にして息切れ。そうです。ここは、空気が薄いのでした。

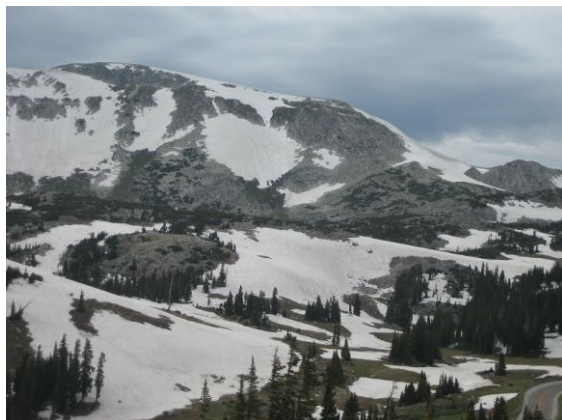
こうして、無事、アメリカ大陸の分水嶺越えを体験でき、一度、山を下る。そして、River

しまった。そういえば、シーニックドライブウェイの紹介本のなかにこんな景色を写真で見たことがあるぞ、これだったのかと思いなおして、走る車からもう一度振り向いて、感動を新たにした。全く、地図にも紹介されていないし、びっくり仰天の風景がこんなところに何気なしに出現するのだから、気ままな一人旅もなかなか気が抜けないのである。やがて州境を越えて、直ぐに 70 号線に入る。この道は、冬には閉鎖される山越えの道。それだけにどんな風景が迎えてくれるのか楽しみ。とこのろが、暫く走り、山道にかけると、突然牛の集団が道をさえぎっている。



Battle Pass にて

Side という町で、今度は一端 230 号に入る。実は、Laramie に行くには、もう一度山越えをしなくてはならない。というのは、ここに、Medicine Bow 山脈があるからだ。そして、なんとここの峠の Snowy Range Pass は、Battle Pass より標高が高いのだ。時間も大分た



Snowy Range

空になった手綱だけをもってポカーンと突っ立っている。な一るほど、あの馬さんもなかなかやるもんだと、他人ごとをよいことに思わず噴出してしまった。

とんだハプニングがあったが、山道を登りに登って Snowy Range に着く。と、これが凄い。標高は、11000Ft とあった。勿論、息切れた。雪を抱いた険しい岩山がこの峠から北に向かって延々と続いている。ここが、Medicine Bow といわれるくらいだから、かつては、インディアンの祈祷師がここまで登ってきて、部族の将来を占い、予言したのではないかと思われる。なんと、この岩山の直ぐしたに池があり、ここで釣りをしている人がいた。こんな山の高いところで、一体どんな魚が連れるのだろうかと思いが疑問に思ったが、そこはなんでもありのアメリカ。ヒットしたら、大きな魚が何万年もの間にここに住み着いているのかも知れない。すっきり、快晴というわけには行かなかったが、どうやら、あの雷雲を避けて峠越えができたというだけで、大満足。

ったが、さあ、いよいよ 130 号へと行くだんになり、どうも雲行きが怪しい。前方の北のほうには稲妻だ。さあ、どうする。このまま、山越えをするか、それでも道がはっきりしている I-80 に向うか、思案のしどころ。でも、I-80 に行くとなると、俄かに発達し、どんよりと真っ黒になったあの雷雲の地域を通らなければならない。一方、130 号線は直ぐに東に向きを変える。そうすれば、あの雷雲とどんどん遠ざかる方向になる。雷雲の広がる速度と車の走る速度とどちらが速いか。ここは賭けになるが、どうせここまで来たんだ。お天道様もきっと味方をしてくれるに違いない、なんてかつてに思い込んで、えい、やーとばかり、130 号を走ることにした。さあ、それなれば、とにかく、走れ、走れ、だ。となんと、今度は道に馬だ。馬が道をふさいでいる。これまた、一瞬ドキリの状態。私の車に馬が驚いて草むらに走りこむ。ところが、実はこの馬の持ち主が、少し離れたところで、

こうして、山を下ると、Centennial という小さな町についたが、じつは、ここから Laramie までのおよそ、20mile、これがまた凄い大平原。ところどころにかけてはここに川が流れていたのではないかと思うくらい、川原に転がっているような石がごろごろしていたが、あとは、全くの大草原。ここに牛が放牧されているが、この広さからすると、まさしく自然の中のしみの程度。よく、人からララミー牧場ってどのあたりと聞かれるが、この光景をみて、ひょっとしてみんなが期待しているララミー牧場というのは、こんな牧場を言うのではないかと思った次第。



ララミーからシャイアンまで。ここもインターステーツを避けて 280 号を走る。これがまた、なんとも奇怪な光景を楽しませてくれるハイウェイだった。

この辺り、その昔、といっても、本当に何万年も前のことであろうが、ここ

牛もまばらで斑だ

に火山があったのだ。そして、その火山から吹き出た溶岩の塊があちこちに散在しているのである。丁度、ヤギの糞が落ちているような感じであるが、これがまた大きいので、私なりにここはダイナザウルスのウンチ公園と命名した次第。

Salt Lake City ---→ Evanston --→ Mountain View --→ Burnttornk

--→ McKinnon -----→ Vernal ---→ Craig -----→ Baggs

---→ Riverside -----→ Ryan Park ---→ Centennial ---→

Laramie -----→ Cheyenne

この日の走行距離は、594mile でした。

俺、今度オレゴンに行くんだ。

十一日目（ 7月7日 ） 最終日 Cheyenne to Nebraska

いよいよ長かったこの夏の挑戦ドライブも最終日。未知の世界に飛び込む前、何が起こるか一抹の不安はあったが、いまにしてみれば、よくも無鉄砲に出かけたものだとながら驚きさえ感ずる。言葉に不自由をしながらもこのアメリカ大陸の北西の外れまで行っ



てきたかと思うと、一つの勲章がついたわけで、それだけでも胸がわくわくする。さあ、あとは何とか無事にリンカーンに帰るだけだ。だが、油断は禁物。慣れた道とは言っても気持ちの油断はそんなものをこっぴ微塵にするだけの恐ろしさがある。だから、これでもう帰りだなどと思わず、今日もなにか新しいものの発見があればと、これから旅にでる気持ちを持ち続けるよう心がけた。

Cheyenne をでるときはこんな天気でした。

とはいえ、今日の予定はなににもない。ただ

ひたすら、I-80 を東に向かった 450mile 走り抜くだけだ。とくにインターステーツはスピード速いに変化に乏しく、単調で、また、未知が真っ直ぐと来ているのでとかく眠気に誘われる。だから、なにかを意識して運転していないとついつい、居眠りがでるのである。

そんなこともあり、普段はあまりインターステーツを走らないようにしているが、時間の節約と、知らない土地では仕方なくこれを利用する。その時には、大体、30 マイルおきくらいにあるレストエリアには必ずよるようにしている。ここで、一服すると、例え僅かの時間でも気晴らしになり、眠気の誘惑から目が覚める。昔は、ここにい



おっ、ネブラスカにも石油の井戸があった。大発見

ろいろな観光の情報が手に入り、ここによるのが楽しくてしょうがなかったが、今では、その土地の様子も大分、分ってきたし、また、場所によっては、トイレ休憩だけと言うところもある。

このレストエリアは、どこの州にも州境から 10 マイルくらいの間に、インフォメーションセンターというのが、ここには、その州の観光案内資料が山ほどおかれている。州全体のガイドブックは、何も本屋で高い金を出して入手しなくても、この本でその州の年間のイベント、各都市の名所、そして、その周辺の娯楽施設や、リゾート地、ひいては、ホテルの案内まで詳しくでている。この一冊があればトラベルの計画も容易に作ることができるのでとても役に立つ。だが、問題は、その州に行かないとこれが手に入らないとい



ネブラスカの大草原

うことだ。ホテルの割引券や観光地の入場料の割引券がついたものさえある。まことにアメリカのこうしたサービスの充実ぶりには、頭が下がる。こんなところでしか手に入れることのできない情報だから、その目新しさとともに、この本自体がお土産代わりになる。

こうしたインフォメーションセンターは、インターステーツの入り口、つまり、州が変わったところだけでなく、各町のなかにもその町のビジターセンターというのがあり、これがまた、内容が充実している。時には、ここで、その町の土産物が紹介されていたり、あるいは、コーヒーやビスケットのサービスをしてくれることさえある。旅をしていて、ここでそこにボランティアとして活躍しているご老人たちと親しく話すのは、とてもその土地に親近感がわき、一度にその町が好きになってしまうから不思議だ。

この日はワイオミングからネブラスカに入ったので、ネブラスカ州に入ったところにこのインフォメーションセンターがある。でも、いまさらネブラスカの情報を手にいれても面白くないと、ここは、とにかく休憩だけ。



Kearney(Lincoln から 130miles)では、こんな青空

ところで、アメリカの道路地図帳のアトラスという本についてすこし紹介しよう。この本、スーパーに並んでいて、僅か数ドルでアメリカ全土、そして、カナダの分までの詳細な道路網が州ごとにまとめられている。この地図が便利なのは、地図の中に、その地の有名な観光名所がのっていること。

また、ポイントからポイントまでの道路の距離数がでているから、これを元に大雑把な所要時間が計算できる。というわけで、毎日の走行距離は、この **mile** 数を元にして計算し、その日の宿泊地を決めるようにしている。この地図を見て、アメリカの道路行政の合理的なところをなるほどとおもうことがいろいろある。まその一つは、まず、インターステーツの出入り口は、すべて番号がついているが、実はこれが、その州の西の州境、あるいは、南北に走っている場合には、南の州境からの **mile** 数になっていることだ。数字なので自分の出口が直ぐに覚えられるのと、通過したばかりの出口の番号をみれば、自分の目的地



の出口の番号との差から、あと何マイル残っているかということが、簡単に計算できるのだ。こんなやり方にまことにこ

なんとも怪しげな雲行き

この国の合理性を感じる。また、ご存知のように、東西の走る道は偶数だし、南北は奇数の番号がつけられる。重要なハイウェイは、十番ずつつけられ、それから発生するカウンティのハイウェイは、この番号の一桁目に数字がついたり、百番の桁に数字がついたりしているから非常におぼえやすい。ただ、アメリカでも、東海岸や西海岸になるとかなり複雑な番号になるが、ネブラスカのようなアメリカの中西部では、道路は真っ直ぐ、東西南北ははっきりしているので、この道路の付けかたが非常に合理的に思われるのであろう。これだけでも十分使うのに便利であるが、特に私のように車でドライブしながら、周りの景色を楽しんで走り回るといふ人のために、シーニックドライブウェイといって、とりわけ景色の堪能できるドライブコースにはしっかりとマークがついている。どんな景色が見ものかは、行って見ないと判らないのは当たり前。でも、そこになにかがあるような匂いがしてくるから、これがまた楽しい。というわけで、私は、毎日会社で、昼休みにはこれ



を開いて、どこか新しいドライブコースを探すのに熱中している。すでに三冊目がぼろぼろな状態。今回もこの地図にはお世話になりっぱなし。これなくしては、アメリカのドライブは到底考えられないというほど、私にとっては貴重なものだ。

ドライブで役立つ、ガイドブックは日本で手にいれたものがとても便利。流石旅行代理店が編集したものだけに、とりわけ親

西の空には、まだ青空も覗いていたんですが・・・

切。アメリカで手に入るガイドブックは、電話番号は載っているが、住所が書いてあることは少ないので、なかなか我々には目的地を探すのが困難。その点、見所、見学の方法、簡単なコースの説明、それに、なんと何と言っても、住所をのせてくれてあるのが嬉しい。見知らぬ土地で目的の場所を見つけるのは、コースの案内用看板が殆ど立っていないアメリカの観光は旅行では、旅なれている人でもなかなか困難なもの。仮にあったとしてもほんのノートの大きさぐらいのもの。これでは、初めての場所ではついうっかり見落としてします。われわれはナビを使って、これに住所を入れればたちどころに人工衛星をつかって目的の場所を探し出してくれるわけだ。

というわけで、アメリカで調達したナビをお供に、道に迷うのも安心という気楽な気持ちで旅ができた。帰ってくれば、興奮覚め止まぬうちにまた、次の旅への意欲がむらむらと湧いてくる。さあ、今度は〇〇に行くぞ。〇〇がなにかって、それは、内緒。

この日の走行距離は、386mileでした。

こうして、11日間というとてもないドライブが終了しました。アメリカの自然、大発見、そして、粹なお巡りさんにスピード違反を見逃してもらったとんだハプニング、感激の太平洋、驚愕のソールト・レイク・デザートの塩の世界。このドライブで走った距離は、結局、5945miles。何キロになるかって、そんなこたあーどうだっていい、という感じです。

(2008 年 7 月 26 日)

オーツ、すげえーの連続。

ネブラスカからワシントンまでドライブしてきました。とにかく、驚きの連続でした。それは、こんな調子。

おお、ワイオミングだ、この世界。



地平線がどこまでも続く。ここに地平線をさえぎるものがないから、まさしく、横に筋を引けば、この景色が全部描けるという感じ。まるで、大海原のような大地が限りなく続いている。こんなところで、やまびこという言葉が分るのだろうか。とにかく音を反射するものが何もないのだ。こりゃー、スゲえー。

モンタナの大草原



ワイオミングから、モンタナに入る。ここは、**custter** 郡と呼ばれる地域。ここもまた、ただ、ただ、草原が果てしなく続く。ハイウェイは限りなく真っ直ぐ。こんなハイウェイを走っていると、アメリカはいざというときにはどこにでもジェット機が離着陸できる滑走路があるということ。

こりゃー、スゲえー。

これがグレートフォールか。



町から少し離れたところに、**Eagle Fall** というのがある。丁度、この滝の上にダムが作られているので、ここで水量は調整されているが、この滝の滝口、横幅が凄い。その滝口全体から水が落ちるさまはなかなか壮大だ。ところが、これでびっくりしてはいけない。この滝の下流にもう一つ **Rainbow Fall** というのがある。その

名のとおり、角度がよければ、この滝いっぱいには虹が出るのであろう。それくらい水しぶきが上がっている。ここもダムで水量が調整されている。その一角が放流されていたが、そこから上がる水しぶきだけでも、ここに来た Lewis が感激したことが容易に伺える。Eagle の滝と比べれば落差もあり、これが全部放流されたら、それこそ幻想の世界をかもし出すに違いない。

こりゃー、スゲえー。



グレーシャーの雪山

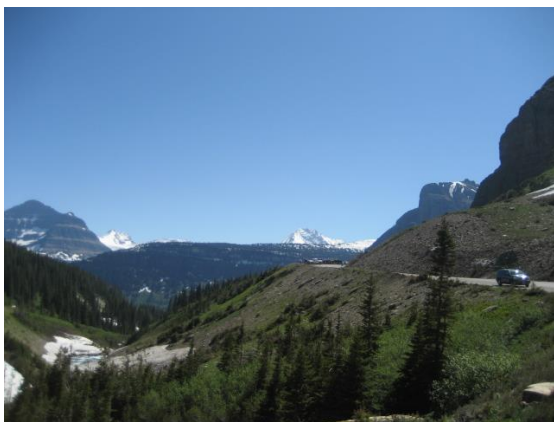


国立公園だけに、これは説明が不要。とにかく足元の湖から、標高が 3000 メートル近くまである頂上まで稜線が真っ直ぐ伸びているのである。どうやって昇るのだろうかねえー。

でも、時間があればここで何日でも山歩きができるというわけ。まあ、数ヶ月は掛かるかも。

こりゃー、スゲえー

なに、通れない？



この日は、Logan pass を越えて、山の西側に出るつもりでいたが、あいにく一週間ばかり前に雪が降り、まだ、数メートルの積雪があるという。夏なのに、何しろここは北国なのだ。しかも、この岩山に数メートルとは、こりゃー、スゲえー。

崖なのにガードレールがないぞっ。



ということで、回り町をすることになりました。がなんとこの道、山の中腹を切り開いたもの。左は山が迫り、右はこの下 300 メートルくらいのなだらかな傾斜。といえば、なんでもないようだが、実はこれが崖なのです。すれ違うのがやっというのに、ガードレールがないのです。こりゃー、スゲえー。

カナダまで続く堰止湖



この湖は Kootenai という川を堰き止めてできた湖です。この湖の名前がハイカラ。Kootenai, と Canada、そして、アメリカの USA の三つの頭文字をとって、Koocanusa という。ダムのある Libby からカナダまでその長さは、90mile。途中に国境線があるとのこと。

こりゃー、スゲえー。

何だ、どこまでも麦畑。 スケールが違う。ワシントンの農場



ワシントン州に入ったら、なんと今度は、地平線のかなたまで麦畑。農家がこの大地にまさにポツン、ポツンという感じ。しかも、道路の左側が広大な麦畑、右側は、休耕地というのだからあきれる。少し走ったらこんどは、ここは荒涼とした荒地。一体この国、どこまで広いんだ。

こりゃー、スゲえー。

葡萄畑。日本の武道も、この葡萄畑にはまけるよ。



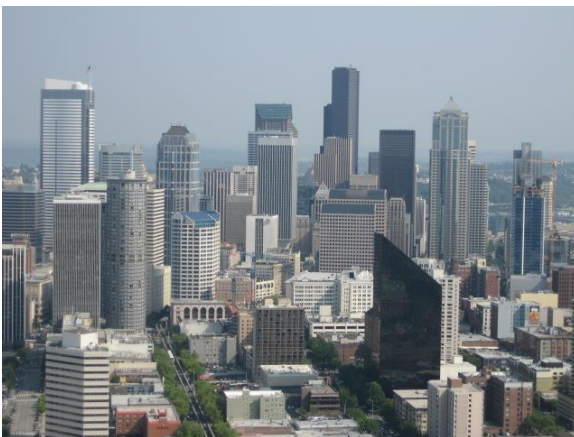
Moses Lake から、丘陵地帯を北に走る。小高い丘が延々と続いている。ここには水系があるので水は豊富かもしれない。このどこまでも続く丘に緑が映えている。ブドウ畑だ。その広さの凄いこと。見渡す限りとはこのことを言うのか。これじゃ、幾ら日本の武道が強くて、この葡萄園には叶わないよ。こりゃー、スゲえー。

カスケードはすげーゾッ。



ワシントン州とカナダの国境近くにあるナショナルパーク。冬は人も寄せ付けぬ厳しい氷の世界になるのだそうだ。夏はこの峠を越えることができる。5,400 フィート程度の標高だが、とにかくここはもう北緯 49° に近い。稚内よりも北なのだ。「わっ、叶わない。」というわけ。こりゃー、スゲえー。

流石シアトル。写真っ、じゃ撮るか



イチロウが頑張っているシアトル。この都市圏の人口が約 400 万だそうだ。アメリカでも有数の大都市。カナダとの国境が近い。シアトルは湾の中にあり天然の良港。ということでここが栄えたのだと思う。それにしてもこの摩天楼の林、流石。こりゃー、スゲえー。

あれは? 母艦だ。僕、ぽか〜ん



湾を挟んでシアトルと反対側にある Bremerton は、原子力空母の造船所があるところ。始めは、変な格好をしたビルだと思ったが、なんとこれが航空母艦。しかも三隻も停泊していた。宇宙船間「ヤマト」を見ている感じ。こりゃー、スゲえー。

オレゴンのナショナルフォレストは規模が違う。



太平洋は親潮がオホーツクまで北上し、十分に冷やされてから、カナダ・アメリカの海岸線に沿って南下してくる。こうして温かい空気が冷たい海流の上で、一揆に冷やされると猛烈な霧を発生する。というわけで、ワシントンやオレゴンの海岸には常に湿気がある。このため、木々の生長には絶好の環境。だから、オレゴンのナショナルフォレストの茂みは並大抵ではない。とにかくナビが効かないほどだ。

こりゃー、スゲえー

クレーターレイクは雪山だった。



アメリカの湖でも一番水深が深いというのがクレーター湖。カルデラ湖だ。標高は、2000メートル程度。でも、ここも北国。この雪の深さ、一メートル以上はある。道路の整備はしっかりしているので、ここを数10マイルで飛ばす。スリルは満点。

こりゃー、スゲえー。

フォレストの境は、十マイルもまっすぐ。



驚くではありませんか。アメリカの大地、道路を敷設するにしても、まるで定規で線を引いたように真っ直ぐに作ってしまいますのです。何しろ邪魔になるものはありませんから。

このナショナルフォレストの境を走っている道路は、東西に 10mile、なんと、南北には 40mile くらいが真っ直ぐだ。こりゃー、スゲえー。

Summer Lake と Abert Lake



アメリカは湖があるとウォーターレジャーが直ぐにはやる。大型バケーションはボートでこんな湖を走り回るのが、ストレス解消の常套手段だ。ところがこの湖には、そんなレジャーはない。この湖は水の出口がないのだ。何万年という間に湖の水はどんどん干上がり、湖岸には塩の平原ができる。そんな湖は人気を寄せ付けない。

こりゃー、スゲえー。

自然の芸術品 Shoshone の滝



ミズーリ川とコロンビア川がアメリカの山の中で繋がっていると思われていた時代がある。その中継点を探すために Lewis と Clark は探検をした。そして、コロンビア川にでると、そこには、岩の彫刻に豊富な水のもたらす水しぶき。まさにこれは自然が大地に刻んだ芸術品だ。

こりゃー、スゲえー。

何だ、これは塩の世界だ。 **Salt Lake Desert.**



インターステーツ 80 を使って、ネバダからユタに入ると、そこには、ここが地球の上かと絶句するような世界が展開する。**Salt Lake Desert** だ。ここも、満億年という地球の歴史のなかで水が蒸発してできた塩の世界。この先の人の住んでいる気配はない。このまま進んで大丈夫かなと錯覚する。

こりゃー、スゲェー。

トラックとぶつかるー。



「あっ、危ない。」もう、お陀仏かー、と思うような情景。でも、安心してください。このトラックは牽引されているものです。

アメリカのインターステーツでは、こうした牽引車をよく目にします。なかには、二台、三台引っ張っているものも。

こりゃー、スゲェー

あれが **Dinosaurs National Monument**



コロラドのロッキー山脈はもともと海底が隆起したもの。そんなところに、かつてはマンモスが闊歩していたのです。その化石がこうした岩山にごろごろと露出されているのです。だから、ここは、化石の宝庫。こんな形の山は、山そのものが恐竜の化石のようです。

こりゃー、スゲェー

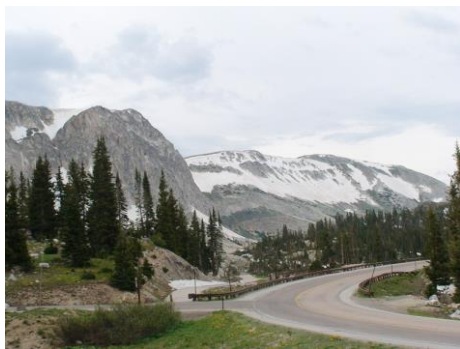
Continental Divide



ロッキー山脈を東西に横断すると、こうした大陸の分水嶺を越えることになります。勿論、ここにもハイウェイが走っていて、気持ちのいいことなんのって。何しろ、3,000 メートル近くありますから。外にでて、自動シャッターで写真を撮るときには、結構息切れがするんです。

こんな素敵なカーブの山道を 60mile くらいで走るんです。
こりゃー、スゲえー。

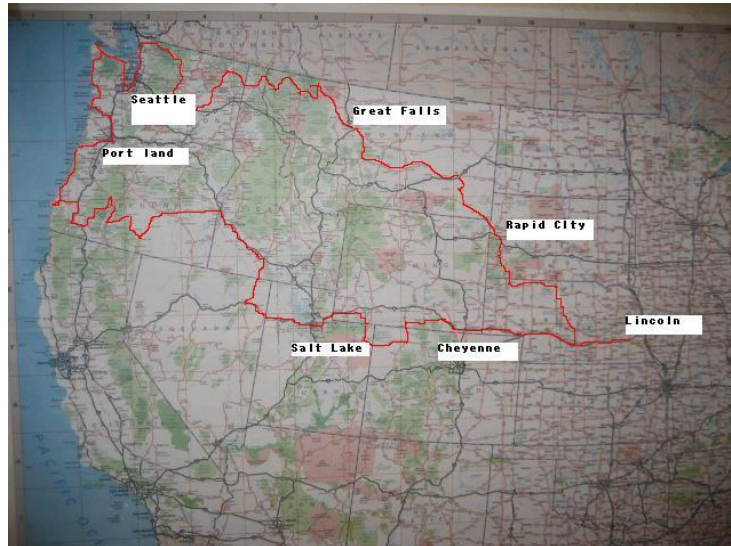
もっと凄い Pass



ところが、Medicine Bow 山脈の峠は標高がもっとあります。ここの Snowy Range は、標高が、11,000 フィート。回りはご覧のような雪景色。こんな標高でも結構、木が育っていました。なんと、この岩山の麓に湖があり、そこで釣りをしている人たちが居ました。一体どんな魚が連れるんでしょうかね。

とにかく、こりゃー、スゲえー。

そして、走った距離が 5,945miles すぎえー。



11日間をかけて、アメリカ北西部をぐるっと回ってきました。目的は、アメリカの北西端に辿り着くこと、Lewis & Clark の目的地、コロンビア川の河口に立つこと、そして、アメリカの未知の自然を実際にみてくること。このルートでのかって気ままな1人旅。走った距離は、5,945 miles でした。*にして 9,500Km は、東京から、????? どこまでになるのでしょうか？